
お・り・が・み 死神の黙示録

ギザ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お・り・が・み 死神の黙示録

【Nコード】

N2455L

【作者名】

ギザ

【あらすじ】

少年は魔剣を手にし、死神となった。

そして死神は魔王候補の少女に出会う……。

お・り・が・みの二次創作です。試しに書いたただけなので続くかどうかはわかりません。

Act・0 死神と魔剣（前書き）

初書きです。

温かい目で見守ってくれたら有り難いです。

不定期更新なので、過度な期待はしないでください。

なお、苦情はいつさいがっさい受け付けないうもりなので、しつこく承
ください。

Act・0 死神と魔剣

とある国のとある広い森の中。そこには一軒の木造の家が建っていた。

しかしその家は既に見る影もなくなっていた。

なぜなら巨大な炎がその家を包み込んでいたから。

そしてその燃え盛る家を見つめるのは、白銀の鎧に身を包んだ複数の聖騎士達。

左肩の不自然に巨大な肩当には聖騎士の剣十字、そしてXIIのマーク。

「これで『白雪姫』も死に絶えたか……」

その中の、隊長角であろう騎士がポツリとつぶやく。

彼らは光の神の下、魔に神威を知らしめ、魔を徹底的に撃ち滅ぼす対魔組織『神殿協会』の保有する12の聖騎士団の内の一つ、第十一聖騎士団である。

彼らの今回の任務は、十数年前に『氷結最強の勇者』、またはその美しさから『白雪姫』と呼ばれていた異端の勇者の始末であった。

しかし異端者と呼ばれていても具体的に何をしたかは公表されていなかった。

『裏で最高位の魔、魔人とつながっていたため、魔人と共に逃亡した』

ただこれだけである。

当時その勇者はその強さと美貌のおかげで正義の象徴のような扱い別の言い方をすれば、宣伝のためのアイドル という見方も多かったため、この事実には誰もが落胆した。

そして搜索すること十数年。漸く足取りをつかみ、こうして神威を知らしめに来た、というわけである。

「なぜ、貴女のような、正義の代名詞と言っても過言ではない貴女が異端者などに………？」

実はこの隊長も当時のファンの一人だったりする。

この任務を言い渡されたときは正直複雑な気分だったが、自分は神に仕えし聖騎士。自分はただ預言者のお告げに従い、悪に神の鉄槌を振り下ろすのみ。

「……………主よ、彼女に安らかな眠りを与えたまえ」

本来聖騎士が異端者に対して言うはずのない言葉を、この隊長は口にした。自分以外の誰にも聞こえないように。

異端者に対して安らかな眠りなど以ての外。下手すれば自分までもが異端者になってしまう言葉だ。

だが彼はこう言わずにはいらなかった。なぜなら彼女に憧れて聖騎士へとなったのだから。

「団長！」

そこに団員の一人が駆け寄ってきた。

「どごした？」

「はっ、この辺りを搜索していたところ、血痕を発見しました。森の奥へと続いています。如何いたしましょう？」

血痕？……まさか『白雪姫』の……？

いや、ありえない。確かに彼女はこの炎の中に消えたのだから。

「『白雪姫』と共に逃亡したという魔人かもしれん。追跡して神威の名の下に、浄化するのだ！」

「」「はっ……！」

「はあ、はあ……くっ……！」

燃え盛る家と聖騎士達からかなり離れた、といつても未だ森の中を走っているのは銀髪の少年だった。

手で押さえた脇腹は怪我をしているらしく、服が少し赤く染まっていた。

「グスッ……………母さん……………」

少年は『白雪姫』の息子だった。

しかしその母親は、今や先程まで仲良く暮らしていた思い出の詰まったあの家と共に燃えてしまった。

「畜生……………！」

母親一人守れない自分が、不甲斐ない。

「あつ……………！」

木の根に足を引っ掛け、顔面から転ぶ。

しかし少年は立ち上がらない。

「畜生、畜生……………！」

悔しさのあまり、地面を何度も殴る。血が出ていようと、手に激痛が走るうとも、殴り続けた。

自分がかつて『白雪姫』と呼ばれた勇者の息子。なのに何も出来ずに終わってしまった。

「僕はなんてだらしないんだ……………!!」

「確かに、だらしない上にみっともないわね」

「っ!?!」

いきなり聞こえた女の声にガバツと起き上がり、周りを見回す。しかし誰もいない。

「誰だ!?!出てこい!」

「誰と言われてもねえ……………。通りすがりの魔女だとも言うておくわ。姿が見たいなら木の上を見なさい」

その言葉どおりに上を見上げれば、木の枝に腰掛けて脚を組んだ黒尽くしの女がいた。フードをかぶっているため表情はよく見えないが、水色の髪と眼鏡を着用していることはわかった。ちなみに裸足だ。

「……………誰だアンタは」

「だから言ったでしょう？通りすがりの魔女だって」

「魔女？」

自称通りすがりの魔女は脚を組み替える。……………怪しすぎる。

「……………あいつらの仲間か？」

「こんな黒い格好した聖職者がいるものですか」

それは、確かに。

「……………その通りすがりの魔女が何のようだよ。僕は逃げなくちゃいけないんだ」

「自分のお母さんを殺した連中から？」

魔女のその言葉に心臓を鷲掴みにされたかのような感覚に陥り、再び走ろうとしていた足を止めた。

「貴方のお母さんはかつて『神殿協会』において『氷結最強の勇者』

と呼ばれていたほどのすごい勇者だったの」

魔女はいつのまにか木の上から消えており、別の木の上にいた。

「彼女のことを尊敬し、敬愛する者もたくさんいた」

再び別の木の上に現れる。

「けれども彼女はある日異端者と呼ばれ、協会から逃げざるを負えなくなった。……どうしてか、知っている？」

今度は真正面に現れた魔女が不適な笑みを浮かべる。

実を言うと、知らない。

母親からは「お母さんは神様を裏切ってしまったの」と教えられたことがあったが、それ以上は聞いていないし、聞かなかつた。

「……アンタは知ってるのかよ」

「ええ、知っているわ……聞きたい？」

「教える」

なぜこの魔女が知っているのか、そんなことはこの際どつでもいい。

なぜ母が死ななければならなかったのか。なぜ奴らが自分達の生活を奪う権利があるのか。それを知りたかった。

「あなたのお母さんがしたことは協会の勇者としては最悪のこと」

魔女は裸足でこちらに歩み寄ってくる。

「けれども人としてはそれは誰にでもある極々一般的な感情。それを持ってしまったのよ」

「……感情？」

「ええ。それわね」

歩みを少年の目前で止め、口元に人差し指を持っていき。

「恋心よ」

言い放った。

「恋、心？」

「ええ、恋心。ただそれだけ」

……それだけ？

タダ、ソレダケ？

「もつと具体的に言いましたよ？あなたの父親は人間ではなく魔人。神殿協会の勇者が魔の最高位である魔人との恋なんて許されると思う？許されるはずないわよね？だから『白雪姫』は魔人と共に協会から逃げた。けれども貴方のお父さんは追っ手に殺された。その時貴方はもう『白雪姫』のお腹の中にいたそうだけど」

「……………」

「そして貴方を産んでからの十数年。協会の目を欺きながら貴方と

共に幸せに暮らし続けた。けれどそれも限界が来た。その結果が今、この現状よ」

「……………」

「…………許せない？」

魔女はそう問い掛けてきた。

「…………当たり前だろ」

「なら、どうしたい？」

「あいつらを倒したい…………！」

「それじゃあダメね」

魔女が腕を組んで、少し呆れた表情をする。

「何がダメなんだよ！」

「『倒す』程度である宗教団体が止まると思っつ？」

「……………どういう意味だ」

「そのままの意味よ。あのなかれ教は多少打撃を与えた程度じゃ止

まらない」

「なら、どうすればいいんだよ!」

「ウフフ、バカねー……。簡単よ……。『殺せばいい』のよ」

「……………っ!？」

その言葉と共に、魔女の表情が不適な笑みから邪悪な笑みへと成り代わる。

「彼らを動かしている最大の動力は創造主と預言者に対する『信仰心』。ならばそれを殺してしまえば彼らは実質組織としての機能は失うわ」

三日月型に口を歪ませた魔女が近づいてくるのに対し、少年は冷や汗をかきながら後退る。

「幸いにも貴方は人間と魔人、しかも母親も父親もかなり強力な力を持った存在の間に産まれた『雑種』の更に『当たり』に分類される。下手をすれば『アウト』にもなれる可能性を秘めた奇跡の産物……………」

後退っていた少年はやがて木に背中をぶつけて止まるが、魔女はお構いなしに近づいてきて、少年の頬に手を添える。

その表情は既に邪悪な笑みではなく、まるで母親が子を諭すような優しい笑みだった。

「その力をどう活用するかは貴方次第。私に出来ることは只一つ。貴方の復讐の手助けをしてあげること」

そう言う魔女の手にはいつのまにか、鞘に収まった長剣が握られていた。

「それ、わ？」

「これは私が作った魔剣『ダインスレイヴ』。大昔の神様の魂が埋め込まれた神殺しの魔剣よ」

魔剣を鞘から抜いて両手に持ってこちらに差し出してくる。

その刀身は黒がメインで鍔から剣先にかけて白いラインが走っている。鍔は灰色で直方体。それぞれ四方向に角がついている。柄は包帯を隙間なく巻かれ、柄頭にも角がついていた。

「この魔剣はあなたの力を引き出してくれる。ただし、この魔剣に選ばれることが出来れば、の話だけだ」

「選ばれる?。」

「この魔剣はかなり気まぐれなの。誰を自分の所有者にするかはこの魔剣次第」

魔女は更に強く差し出してくる。自然に魔剣に目を奪われる。

「さあどうする?私を無視してこのまま聖騎士達の追っ手から逃げ切ってみせるか、それともこのダインスレイヴで騎士達を殺して修羅の道を歩むか……迷っている時間はないわよ?。」

魔女の言うとおり、少年の後方から複数の足音が木越しに聞こえてきた。

「貴方にはカミをも殺す素質がある」

その魔女の言葉が、とても魅力的に聞こえて。

「大丈夫、自信を持ちなさい。貴方ならきつと最高の“死神”になれる……!。」

気が付けば、魔剣へと手が伸びていた。

団員の一人が発見した血の跡を辿った先に見つけたのは、上から下まで黒尽くめで何故か裸足の女だった。

聖騎士達は即座に女を取り囲み、ミスリル合銀製の剣を抜刀する。

取り囲んでから気付いたが、もう一人“黒い刀身の剣を持った”少年が木の影に隠れていた。俯いていてその表情は見えない。

「団長。魔人です」

小型端末 マジカライズ・インジケータ を女に向けた団員が報告する。

こちらの人数は約五十人。対する相手は女一人に子供が一人。しかし油断は出来ない。

奴らは人の姿をした魔物。魔の中では高位に括られ、その戦力は枢機卿を警護する聖騎士の最高峰“大強者”にも匹敵するといわれる。

「貴様が『白雪姫』殿を誑かした魔人か？」

それを聞いた女は不適に微笑んだ。

「いきなり取り囲んできた挙げ句、誑かしたかなんて言い掛かりをつけてくるなんて、いいご身分ねえ……？ 私は只の通りすがりの魔女よ？」

「とぼけるな！！！」

自分の頬に手を添えて困った表情をした女に怒鳴り付ける。女はビクツと体を震わせ今度は脅えた表情をするが、そんなものはまやかしだとわかつている。騙し討ちは魔人の常套手段だ。

「闇より生まれし人の形をした魔物よ。神威の剣をその身に受け、浄化されるがいい！」

団員達が剣を構え、一部の者は魔法の詠唱準備にかかる。

それを見た魔女は表情を一変させ、下等生物を見るかのような目で

こちらを見渡ししてくる。

「……人間ごときが、たかだか五、六十人ぼっちで取り囲んだだけで私に勝ったつもりか？生意気だわ。『教育』が必要ね」

その瞬間、魔女の背中から闇色の魔力が吹き出した。

魔力が十二本の触手のようになり、内二本が足代わりとなって魔女を宙に浮かばせる。

本性を表したか……！

団長は聖騎士となってから……いや、この世に生を受けてから今まででこれほどまでに戦慄したことはなかった。間違いなくこの魔人は今まで自分が浄化してきたどの魔よりも強大で、危険だ。

「やっ……」

十本の触手の先端が獲物を狙う蛇の口のように開き、弓を引き絞るかのように頭を後方へ下げる。

「ちよい待ち」

しかしそれを遮ったのは、俯いたままの少年だった。

「あら？どうかした？」

「俺”がやる」

それを聞いた魔女は少し意外そうにしたがすぐに満足そうに微笑んで、魔力を消して地面に着地した。

少年は魔女の返事を待たずに剣を自分の顔の前まで持ち上げる。

不意に。

『……………てめえみたいなクソガキが次の俺の使い手だと……………？』

「っ！？何者だ！？」

魔女の声でも、少年の声でもない、謎の音が響く。

騎士達は辺りを警戒するが、騎士以外には魔女と少年しかいない。

「誰がクソガキだよこのクソ魔剣」

『んだとコラアツ！テメー、上等だ！泣かすぞこのタコ！』

その声は、なんと少年が持つ黒い剣　　ダーインスレイヴから発せられていた。

『おいエキドナ！なんだこのガキは！？全然礼儀がなってないぞ！』

「あなたに対して礼儀をとる人なんて、そうはいないと思うけど」

『なんだと！？』

なぜか口喧嘩（ダーインスレイヴが一方的に文句を言っているだけ）を始めた魔女　　エキドナとダーインスレイヴ。

「いいからその子と契約を交わしなさい」

『冗談じゃねえ！もっとマシな奴いるだろ！？』

「これだから貴方は……人を見る目というものを鍛えなさい。その子は今までの使い手の中で一番貴方を強くしてくれるわよ。なにせ『白雪姫』と『阿修羅の使徒』の間に生まれた子供だもの」

『んだとお……？このクソガキがか？』

ダインスレイヴはエキドナの言葉を怪しむ。

「『白雪姫』殿の息子だと……?」

エキドナの言葉に反応したのはダインスレイヴだけではなかった。

「ああ、貴方達はなぜ彼女が異端者と呼ばれてしまったのか知らないのね？マリーチも意地が悪いわね」

「なんだと……?」

「せっかくだから教えてあげましょうか。彼女は魔人と恋に落ちたの」

「貴様……！戯れ言を！」

「あら、証拠ならあるわよ？貴方達の目の前に二人の愛の結晶がいるじゃない」

エキドナが少年に視線を移す。確かに少年は『白雪姫』と同じ、銀雪を思わせる見事な銀髪だった。

「まあ、貴方達がこれを信じようが信じなかるうがもはや関係ないわ。この子が貴方達を殺すもの。この子の母親を殺した貴方達を」

ねえ？と、視線を少年に向けるエキドナ。少年は無反応だ。

『……………はんつ、』白雪姫』はどうでもいいが、『阿修羅の使徒』の息子なら使われてみる価値はあるかもなあ……………おいクソガキ、名前は何？』

「……………黒崎、朝夜」

『なんだそりゃ？朝だか夜だかわかんねえ名前だな……………まあどうでもいい。んじゃ、面倒だし一刻も早くこの騎士共の魂を喰い付くしてやりたいから儀式云々は端折る。その代わり一つ聞かすぞ。……………汝は我を使用して何を望む？』

ダインスレイヴが試すような口調で少年 朝夜に問い掛ける。

『圧倒的な力か？殺戮の果てに垣間見える快楽か？弱者共の死の絶叫か？金か、女か、権力か？それとも 』

「神の死」

『 あん？』

矢継ぎ早に発するダインスレイヴの問いを遮るように、朝夜は自分の求めるモノを答える。

「聞こえなかったのか？俺が求むは神の首、血、魂、命、だ」

その怒りが含まれた言葉に、一切の迷いはない。

『……ガチで言ってるのか？そいつは』

「人の恋路を認めないで何が神だ。そんなふざけたクソ神なんか俺が殺す」

『てめえみたいなクソジャリに殺されるほどあのイカレ連中は甘くはないぞ』

「なんだ？神殺しの魔剣がビビってるのか？」

『誰がビビるかボケエツ！殺すぞ！』

「なら、いいじゃないか。とつとと契約でもなんでもしろ」

なんとという無茶苦茶理論。

騎士達は先ほどのエキドナの殺気も相まって茫然として動けないでいるし、そのエキドナは可笑しそうに微笑んでいる。

『……グピッ、ピギヤハハハハハハハ！面白え！いいぜ、乗ってやるー！』

ダインスレイヴが突然ゲラゲラ笑いだし、刀身もガタガタ震える。

『っしやあ！契約だ！腕切って血を寄越せ！』

「ああ」

朝夜はダインスレイヴに言われた通りに、何の躊躇いもなく自分の腕を切り付ける。

朝夜の血がダインスレイヴの刀身をしたたり落ち、それに呼応するかのように刀身に淡く、赤黒い光が宿る。

『グビツ、血液情報確認！BLOOD INFORMATION
RECOGNITION SYSTEM起動お！アカウント登録開
始いっ！名称黒崎朝夜男性血液型B型年齢十三歳誕生日八月八日種
族人間魔人混合魔力素質氷結レベル6身長百五十七体重四十六声紋
指紋角膜髪質肌年齢その他情報登録中ですしばらくお待ち下さい…
……………グッピャア 登録完了お
っ！あとは登録者による魔剣ダインスレイヴ起動キー詠唱で完
全起動ですなんか俺にお誓い下さい！』

そんな、適当な。

「我、黒崎朝夜は魔剣ダーインスレイヴの主となり、死神となり、神を殺すことを誓う」

『ピググ、ピギヤーハツハツハツハツハツ！！我、魔剣ダーインスレイヴは黒崎朝夜の剣となり、牙となり、爪となり、神をブツた切ることを誓ってやらあ！』

淡かった光が目も明けられないほどに強くなる。

「う、これはっ!?!」

光がその場にいた全員の視界を潰した。

ザシュツ!!!!!!

そして、光が治まると同時に響く、生々しい音。

団長が目を開くと、朝夜の一番近くにいた騎士の胸が断たれ、上半身が朝夜の足元に転がっていた。

下半身の断面からは血が吹き出し、辺りを血に染めていく。

『…………グピピ、気分はどうだ？兄弟い…………』

「……………」

俯いたままだった朝夜が、顔を上げる。

「……………凄く……………清々しい……………！」

その顔に張りついていたのは、悪魔を思わせる、三日月型の笑みと、明らかに正気の沙汰をなくした目だった。

GYAハハハHAハハ破ハハ這HAハハーツツ！！

響き渡る少年の、死神の笑い声。降り注ぐ、血生臭い赤黒い雨。

団長は即座に先程の考えを撤回した。

一番危険なのは、この少年と魔剣だと！

「浄化だ！この魔を速やかに浄化しろおっ！神威を知らしめるのだあつー！！」

「「「「「神つ威イイイイイイイイツツ！！！！！」「「「「「

騎士全員が剣を構え、笑い続ける死神に突撃した。

『殺れえええつ！朝夜ああああつ！！全員まとめてぶつ殺せえええええつつ！！！！！！』

「言われなくても……そうするよおおおお！！！！」

死神と化した少年はラン、と、目を赤黒く光らせた。

「（素晴らしい……！！）」

エキドナは木の上から目の前の光景を見ながら、心の底から本気で

そう思った。

目前で行われているのは、大虐殺。

朝夜がダインスレイヴを振るえば五ほどの胸が切られ、剣を振られればそれごと腕を断ち、盾で防がれれば紙を切るかのように盾ごと首が飛ぶ。その虐殺劇から少し離れた場所から他の騎士たちが魔法の詠唱を終えていた。

「っ 発射ええええっ！！」

ズドドドドドオオオオツツ！！

団長らしき男の号令で、三十ほどの魔力弾が朝夜に襲い掛かり、煙に包まれる。

「これでどうだ………？」

どうだも何もない。

その程度で、死神と化したその子と、我が最高傑作が止まるものか。

『グピピ、きかねえなあ……………』

煙の中から聞こえたのはダoinsスレイヴの余裕たつぷりの声。騎士達の表情が驚愕に染まる。

煙が晴れると、六角形を幾つも組み合わせたような赤黒い魔導障壁^{シールド}で防いでいた。ヒビはおろか、傷一つついていない。

「バカな……………！」

「……………それで終わりか？」

魔導障壁が解かれ、朝夜がゆらりと立ち上がる。

「ダoins」

『なんだ？つてか略すな！』

「いいだろ別に。ダoinsスレイヴって長いし。それより」

『うるせえ！』

朝夜はダoinsスレイヴを縦に構える。

「ぎゃあああああつー!!」

「み、耳が！耳があつー!!」

「頭が……！割れる………っ!!」

『ミヤああアああアあああびいいいいぎいいいいえええっ
っ………!!』

騎士達も悲鳴を上げるが、魔剣の悲鳴にかき消される。

「くっ………！剣を持ってっ！立ち上がれえっ！気力を保つんだ！我ら
には主のご加護が付いている!!」

だから、気力や加護程度であの子はもう止まらない。

あの子は、死神となつたのだ。

「あのさあ、知ってる？神なんてさ、信じたところで何もしてくれ
ないんだよ。神を祈ってなんか貰ったことあるか？神のためにその
剣振って助けてもらったことあるか？無駄なんだよ、お前達のやつ
てることは。神は人間なんてなんとも思っていないんじゃないかね？」

同時刻、日本 某県某所。

ぴきーん。

「……ぴきーん、ときたの」

「ヒヒっ、どうしたんだい………？」

「ダーインが、どこかで叫んでいるの」

「……ああ、エキドナか。彼女も懲りないねえ……。確かにダーインスレイヴなら“天使”を傷つけることが出来る。けど、それ以前に“天使”に近づく機会なんてそうはないのにさ………」

「仕方あるまい。彼女は私と同じ魔導に通ずる者。それに君と同じ科学に通ずる者でもある。自分の研究の成果を実行したいのさ」

「しっかし今思ってもあの“墮天使”は運が悪い……。墮ちてきた上に、よりもよってあんな狭いところに閉じ込められちまうんだからなあ……。同情するぜ。おいらなら退屈過ぎて死んじゃう」

「ぐえつぎゆるぐぐ」

「そうでもないの。もうすぐ“審判の日”なの。それに……」

「それに？」

「今度の“死神”は一味違うようなの。『阿修羅の使徒』の息子なの」

「『阿修羅の使徒』だあ……。？なんだってそんなのが？」

「あの蛇女のことなの。どうせ心の闇をつつついて、協会に勝てる力をやるとか言って、ダーインと契約させたの」

「悪趣味だねえ……。まあ人のこと言えないけどさあ！いひひひひいひひひひ！」

「では、この際エキドナのごとは置いておくとして、その“死神”はどうするのかね？」

「今のところ放っておいても問題はないの。只マリーチの私兵が数百人死ぬぐらいなの。こっちは何の被害もないの」

「ぎゅるげえ、ぐぎゅぐ」

「勿論その内こちらに被害を浴びせるような存在になるのなら、ノエリスプログラムにのっとして殺すの。けど、できるのならばこっちに引き込んで次期魔王の腹心にでもしてやるの。マリーチと対立するという意味では、エキドナとは利害が一致するの」

「なんでい、ここにも悪趣味なのが一人いるじゃねえか……」

「知略に富んでいるというの。ともかく、今は放つといっても痛くも痒くもないの」

「ふむ、ではその方針でいこうか。あとはマリーチがどう動くかだが。……これは議論する必要はないかな？」

「ないだろうね。高みの見物を決め込むだろうさあ」

「裏でクスクス笑ってるに決まっているの」

「……どいつもこいつも、悪趣味ばかりだぜい。なあイワン」

「ぐえっぐ、ぎゅえるる」

日本某県某所。カミガミの会議は終わりを告げた。

同時刻、神殿教会大神殿 座視の間。

「うふふ……くすくす……」

『……なんだマリーチ、いきなり笑いだして。何か面白いモノでも見えたのか?』

《マリーチが突然笑いだすことなんて、いつものことでしょう》

「今とつても面白いモノが見れたわ。エキドナが新しい“死神”を生みだしたの」

《……しばらく動きがないと思っていた矢先にこれですか……。まったく》

『懲りん奴め……』

「くすくす……そう言わないの。貴方にも無関係な話じゃないのよ？」

『わかっている。いい加減あの魔剣はへし折ってやらねば……』

「そうじゃなくて、その“死神”の子。“雪乃”の一人息子よ？」

『……なんだと！？どういうことだ！』

《またエキドナも趣味が悪い……大方貴方への嫌がらせでしょう》

『ええい！あの蛇女め！次会ったときはバラバラに切り刻んで浄化し尽くしてくれる！』

「くすくす、これだから彼女は面白いのよ。いつも私の度肝を抜くようなことをしてくれるわ」

《……度肝も何も、貴女なら視ることができるとして》

「いつも言ってるでしょ？最初から全て見ていたら、何にも面白くないの。こつこつというのは、その場で視るのが一番いいのよ。くすくす……」

『……一番悪趣味なのは、こいつではないのか？』

《何を今更。そんなことはわかりきっていることです。というか、貴方が一番それを良く知っているんじゃないですか？ル　いえ、聖剣『デュランダル』》

『……とうとうお前までその名で呼ぶようになったか、ショーペンハウアー』

《ややこしいですからね》

『そんな理由で以前の名前を忘れ去られる私って、一体……』

「くすくす……さあ、この死神君はどこまで成長するのかしら……
？ああ、楽しみ……」

魔が行き交う第三世界において、様々な思惑が蠢いていた。

これより始まるのは、一人の死神と魔剣の物語。

魔剣を手にし、死神となった少年は何を見て、何を思っているのか。

そして、少年は出会う。

自身の運命を変える、一人の不幸な少女に

Act・0 死神と魔剣（後書き）

魔剣はどこかの別の魔剣を参考にしていますが、できれば触れない
てください。

Act・i 悪の組織によつこそ（前書き）

更新じゃー！……やべえ、一年＋一ヶ月ぐらいの投稿だよ……しかもAct・0よりかなり短いしぐだぐだ……忘れ去られてるだらうなあ……。

こんな駄目作者の駄文でよかつたら読んでいってください。

Act・1 悪の組織によつこそ

日本某所。

薄曇りの真つ赤な朝焼けが、不気味に映りこんだ巨大な屋敷。

その中は玄関のホールからして吹き抜け、レッドカーペット、シャ
ンデリア、鎧の置物、絵画、etc、etc、 しかしなが
ら明かりが消えた瞬間、安っぽいB級オカルト映画か何かの舞台に
なりそうな、古風な様式である。

そんな屋敷の、幾つものドアが連なる長い廊下を、黒スーツに身を
包み、顔の半分上を般若の顔をシンプルにしたような仮面を着けて
たったか歩く十代後半で白髪の少年 朝夜がいた。

「相変わらず無駄に広い屋敷だよなー」

『広すぎて道に迷ってんじゃねえぞ、コラアツ!』

「迷ってねえよ。”魂感知”で貴瀬の場所わかってるし」

背負った鞘に収まっているダーインスレイブこと、ダーインにそう
返し、さらさらしてる割には所々跳ねている白髪を揺らして歩みを
進める。

途中で血が付着した金属バットを肩に担いだ幼女や黒い長髪で美人

なメイドさんとすれ違い、一つの扉の前で立ち止まる。

貴瀬とその他一名の”反応”はこの部屋からだ。

「さてと………どうやって入るのが一番衝撃的だと思うっ?」

『ロケラン撃ち込んでぶち破ればいいんじゃないかね?ピググ』

「いくら貴瀬でも死にそうだから却下。けど”ぶち破る”ってのは採用しよう」

そう言う朝夜は扉から距離をとり、陸上競技でいうところのクラウチングスタートの構えをとる。

足に力を込め、よいい、ドンッ、で一気に駆ける。扉に近づいたところでジャンプ。両足を前方に向け、突貫する　　!

「だあっしゃおらあああああああああああああああああああああああ
ああああっっ!!--!!」

まあようするに、ドロップキックで扉に突撃して蹴破った。蹴破られた扉は開け放たれるどころか蝶番が破壊されて部屋の中に吹っ飛び、途中で何かに直撃したような音と共に部屋の端っこまで滑っていった。

さておき。

「貴瀬えっ！新しい娘を入れるってのはホントですかコノヤローツ
！！……ってあら？いねー」

意気込んで突入したのに肝心のこの屋敷の家主がいない。

部屋の内装は前面に移動式の黒板、ボタンの付いた教卓など、学校の教室風だ。

あとある物といえば、タイルの床にぼつーんと置いてあるパイプの足した机と椅子のセット。

そしてその席に着いている妙に地味いくなえんじ色の制服を着た焦げ茶色のセミロングヘア（多分）の少女だけ　　いや待て。

「……………」

あ、目が合った。少女は目をぱちくりさせて朝夜と、朝夜が蹴破った扉の残骸を交互に見ている。

『なんだあの女、無駄に拳動不審だな。締めるか？』

「まあ、いきなりドアぶっ飛んだら驚くだろ」

少女がきよどつてる間に教卓に置いてあるクリップボードの書類に目を通す。

ふむふむ。吾川鈴蘭16歳、陸上部所属。得意種目はトラック競技。最近読んだ本は山本五十六いそろくの伝記とエルウィン・ロンメルロンメルの伝記……伝記好きなのか？

えーと他には……身長一五五センチに……。

「……おい、身長書くぐらいならスリーサイズとか書いとけよ」

『書くまでもなく”貧相”とか”ちんちくりん”の一言で十分だろ』

「ばっかお前、だからこそいいんだろ！」

『テメエの趣味なんざ知るかボケ』

まあ、置いといて。

「とりあえず、自己紹介でもしとくか。よつと……」

教卓に手をついてそのまま逆立ちして腕の力だけで跳ぶ。ビククリしている鈴蘭（なんか可愛い）の前に、机を挟んで着地。

衣服を整えて、ニカツと笑う。

「初めましてだな、ようこそ伊織邸へ！俺は黒崎朝夜。まあ、立場的には先輩に当たる訳だがこれからよろしくな！」

「あ、はい。初めまして。吾川鈴蘭です。ええと、黒崎さん？」

「あー、やめいやめいそんな他人行儀な感じ。同い年だし朝夜って呼んでくれ。俺も鈴蘭って呼ぶから。そして仮面については触れてくれるな！」

「は、はあ……わかりまし……わかったよ、朝夜」

「よろしい」

多分貴瀬のことだからかなり強引な手を使って連れてきたんだろうが、思ってたより困惑していないっていうか順応している。神経図太いな。……いや、困惑どころか訳が分からなすぎて逆に冷静になれてるだけか？

「ところで貴瀬は？ここにいるはずなんだけど」

「ええと、伊織さんは……」

貴瀬の”反応”は近い。すごい近いのに姿は見えず。マジでどこ行っただ？

その時、部屋の隅で何かが動いた

！

「……………おいコラ朝夜……………」

動いた何かの正体は、先ほど蹴破った扉の下から這い出てきた男。

その男とは、ありふれたグレーのビジネススーツを細身にまとい、切れ長の鋭い目を銀縁の角メガネの奥でギラつかせた二十代前半の青年。

この屋敷の家主にして、悪の組織”伊織魔殺商会”会長兼企画兼経理兼広報兼営業兼、朝夜の上司に当たる伊織貴瀬である。

その貴瀬が、なぜか蹴破った扉の下から這い出てきた。

「……………貴瀬、何でそんなところにいんの？」

「君が蹴破った扉が、僕に思い切り直撃したからだろうがこのボケッ……………」

「ああ、なるほろ。悪い悪い大丈夫か？」

「まるで反省していないな貴様……………まあいい」

完全に這い出てきた貴瀬はスーツに付いたホコリやらなんやらを軽くはたき落とす。

「で？何の用でここに来たんだ？」

「噂の新人社員の顔を拝みに来た」

「ほう、そうか……では、扉を蹴破った理由は？」

「ダーインに蹴破らないと殺すぞって脅されて仕方がなく……！」

『ちよつと待てやこの危険人物コラアツ！！テムエーなに人に罪擦り付けてんだオオツ！！』

「やかましい！ロケラン撃ち込むとか言ってたやつに危険人物呼ばわりされる筋合いはねえ！」

「貴様ら両方共に危険人物だこの大バカどもが！」

「『そんな馬鹿な！？』」

「なぜそんな真剣に【信じられない】みたいなリアクションを返せるんだ……？」

むしろ貴瀬が【信じられない】みたいな表情をした。

「あ、あのー……？」

「ん？ああ、すまん。すっかり忘れていた」

「ででででつでつ、でもでももしかべって悲鳴上げて！さっきの女の人も浮いて！」

「ああ、先にみーこに会ってたのか」

「あとリップルラッフルにもだ。理不尽にも、僕が殴られたのだから……！」

「まあ、リップルラッフルだしなあ」

「無視しないで!?!」

「ああ、再びすまん。まああれらは、そういうところのモノだ」

「へ………?」

「いいか鈴蘭。ああいったモノの存在を知ることが……つまりは二十億を稼ぎ出せる状況ということだ」

そうして貴瀬は鈴蘭の元まで歩み、二つの指先で鈴蘭の顎先を持ち上げ、吐息の感じられそうな距離まで顔を寄せ、鈴蘭の顔を真っ赤に染め上げる。

「ようこそ鈴蘭。君の入社を歓迎する」

「うわっ、質の悪いホストみてー」

「黙れ朝夜。給料無しにするぞ」

「ごめんなさい！」

ジャンピングバック転土下座で謝罪。権力には勝てません。

「まったく、ガキが……」

「あっ、ああ、あのその、伊織さん……」

「っ。」

「ったああああい！」

「僕のことには隷属の意味で伊織様と呼ぶか、服従の念でご主人様と呼べ」

「……で、でも……そんな……」

「ん？どうした、鈴蘭」

「（鈴蘭、鈴蘭。悪いこと言わねえから従っとけ。嫌なのは充分理解できるけども）」

「（ふわぁ……／＼／＼）」

そう言う朝夜も鈴蘭の耳元ではそばそと囁いているので（無意識、無自覚）、鈴蘭からしたらこそばゆい上に恥ずかしいことこの上ない。これで仮面を着けてなかったら、完全に一級フラグ建築士である。死ねばいいのに。

とにかく。結果、耳まで赤くした鈴蘭はくらくらする頭で潤む瞳で小さく頷いた。

「はい……ご主人様……」

「くくつ。いい子だ、鈴蘭」

「うおう……言わしといてなんだが、羨ましいぞコノヤロー」

「言ってる、バカめ」

少女の艶やかな髪を一撫でし、貴瀬は離れた。そして今度は何故か朝夜が撫で始める。

「（うわっ、すごい撫でテク……）」

「へえ……髪質いいな。もっと長けりやいろいろ髪型試せそうだけどなあ。出来てミニポニーかミニツインだな」

「髪フエチめ」

「でっひゃっひゃっひゃっひゃっ。ネコミミスキーに言われたくねえなあ」

「何を言う。ネコミミメイドこそが至高だろう？」

「バカ野郎！至高なのはイヌミミナースだろうが！貧乳だったらなおいしいね！」

「バカはお前だポケツ！まだそんな戯れ言抜かしているのか！寝言は寝ていえ！」

ぎゃーぎゃー！

そんな感じで朝夜と貴瀬が獣耳談義してる間に、何か悪い魔法でも解けたように鈴蘭は我に返って、叫ぶ。

「なっ、なっ、なんなんなんなんですかこの会社っ!？」

「言わなかったか？」

貴瀬が押し上げた眼鏡を輝かせ、その後ろでは朝夜が犬歯を見せて笑った。

「悪の組織だ」

「ま、そのくらいとで……宜しく頼むぜ？ 鈴蘭」

Act・i 悪の組織によつこそ（後書き）

朝夜の着けている仮面は戦極姫2の鍋島直茂の仮面を想像していた
だければ、幸いです。

Act・2 空飛ぶ氷砂糖、後にストライク（前書き）

どうしても会話文が多くなったり文をそのまま使ってしまうことがあるギザです。

こんな駄目作者の駄文でよかったら読んでいってください。

Act・2 空飛ぶ氷砂糖、後にストライク

翌朝。

「ふあ……」

午前六時ピツタシに起床。

木製ベッドから降りて寝間着代わりに黒ジャージから畳んでおいてあったいつもの黒スーツに着替える。

仮面？着けたまま寝てましたが、なにか？

「今日はオリエンテーションだったなー……何やらせられることやら………鈴蘭が」

俺の時はギャングと戦っている誰かをギャングごとぶちのめすことだったなー、とか考えながらネクタイを絞める。

ちなみにその時は、遠距離からM134ガトリング（ゴム弾）を乱射しただけなので、ギャング退治をしていた”誰か”のことは朝夜は知らない。

「魂”を見た感じなかなかの強さだと思ったけどなー。まあ俺の敵じゃないな……おいダーイン、起きろ」

『グゴー……』

壁に立て掛かって寝ているダーインを起こすために呼ぶ。どうい構造をしているのか、鞘と鐔の境目からはなちようちんが出ている。

「おい、起きろって」

『ガゴー……』

起きない。

「起きろやー」

『ZZZ……』

……起きない。

『……フガッ』

「お、起きるか？」

『…………グピピ…………もー、食べねーぞー…………フシユルルル…………』

「……………どーん」

メキヨツ！！

『グピヤアツ！？痛え！つてかなんだ今の音！？テメー、今何しやがった！？』

「でひゃっひゃっひゃっひゃっ。起きたなら良し！んじゃまあ、鈴蘭起こしにでも行きますかねーと」

『無視すんじゃねえコラアツ！』

その言葉も無視して部屋から出る。鈴蘭の部屋の場所はわかってる。なにせ、部屋の案内をしたのは朝夜だ。

そして到着。部屋に入るときにはノックは忘れない。最低限のマナーだ。

それに、ノックせずに入ったら着替えの途中でした。なんて盆ミスやらかすつもりはない。

コン、コン。

「鈴らーん、起きてるかー？入るぞー？」

「ちよ、ちよっと待って！今着替えの途中……！！」

そら見る、伊達にギャルゲープレイしてる訳じゃないぜ！ラッキー
スケベ回避だ！

……べ、別に勿体無かったなんて思っただけだからね！！

なんて馬鹿なこと考えていると、一人の女性が近づいてきていた。

ラベンダー色のリボンで束ねた黒いロングヘアの、美しい女性だ。
名はみーこという。

「うーっすみーこ。おはよーさん」

「あら朝夜君。ダーイン君もおはよう。今朝も早いのね。どうして
ここに？」

「鈴蘭のお世話係をどっかのメガネに押し付けゲフンゲフン。任せら
れたからな。とりあえず起こしにきたら、着替えの途中だった」

「え……？の、覗いたの……？」

「違うわ！？ノックしたら着替え中って返事が帰ってきただけだよ
！」

『つか、あれを覗く物好きはいねえだろ』

「そうなの……。そうよね、朝夜君がそんなことするはずないものね」

「みーこさんや、するはずないって思うのならその凶器を取り出すのはおかしい」

みーこの手には柄の長い、ゲートボールで使うスティックみたいなハンマーが握られていた。あれがめちゃくちゃ痛い。かちこん、と軽く叩かれるだけで頭が割れるような痛みが襲うのだ。

「あー、着替え終わったけど……」

「おっと、んじゃまあ、ごたいめーん！っておおっ!？」

「え？な、何？なんかおかしかった!？」

鈴蘭からの入室許可をもらったので意気揚々と扉を開けると、目に飛び込んできたのは、メイド服。正確にはみーこと同じメイド服を着た鈴蘭だった。うむ、普通に可愛い。

「まあ可愛い。サイズはどうですか？」

朝夜の後から入室したみーこが、鈴蘭の全身を眺め渡す。

「えっと、丁度いいみたいですよ……て、私もメイド服ですか!？」

「今気づいたのか!？」

着替えてる間に気付きそうなもんだが……？

「制服なんですか、これ……」

「伊織様のご趣味なんです……」

「いい趣味してるよなー。メイド服ジャスティス!」

「ごめん、意味わかんない」

「えー………?」

バカな。メイド服はこの世の癒しの象徴と言っても過言ではないのに。

「でも鈴蘭さんは、とてもよくお似合いですよ」

「あああいいいいええ、そんな、みーこさんほどでは……」

上目遣いで謙遜する鈴蘭。まあ、みーこはスタイルいいからな……。

「いやいやよく似合ってるってマジで。俺が保証しよう」

「そ、そうかな……？」

「ああ、もちろんだ！というわけで、朝飯を食べに行こう」

「いや、どういうわけ？」

「みーこ、用意してあるだろ？」

「あれ？スルーされた？」

「ええもちろん。食堂に用意しましたから。鈴蘭さんも一緒に食べませんか？」

「は、はい……」

「うえーい」

『メーシ！メーシ！』

みーこの後について、突然しゃべったダイインにびっくりしている鈴蘭の隣を歩く。

みーこはまさしくメイドらしく背を伸ばし、エプロンの前に手を揃えて静かに歩く。

対して鈴蘭は腕を振ってたつたか歩く。うーむ、同じメイドでも違いを見るだけで面白い。

「まだわたし、詳しいことは聞かされていないんですけど……昨日は大変だったんじゃないですか？」

「あ、俺も聞いてなかった」

「あ……いや……はあ……」

『煮え切らねー答えだな。具体的に何があったんだよ。吐けやコラ』

「……えっと……まず里親の人に借金押し付けられて夜逃げされて……ヤンキーに押し入られて……」

「ストップだ鈴蘭。いきなり突っ込み処が多すぎる」

マジで何があったんだ!?

しかし朝夜の言葉など聞こえてないかのように、鈴蘭の独白は続く。

「そこにご主人様と沙穂ちゃんがやって来て……沙穂ちゃんがヤンキーの短刀とリーゼントを切って……ご主人様に二十億の借金を返すために僕のもとで仕えろって言われて……」

「「……………」」

「車の運転させられて……パトカーにぶつかっても【踏め】。公園にコースアウトしても【踏め】。暴走族の溜まり場に突っ込んで【踏め】。警察署の駐車場に飛び込んで【踏め】……………」

「……………」

「しまいには公安にテロリスト扱いされて

「鈴蘭、もういい。こっちから聞いといてなんだけど無神経だった、すまん。だからもうしゃべらなくてもいいんだ……………」

鈴蘭の目から光が消えてきた辺りで両肩を掴んで止める。みーこもめちやくちや申し訳なさそうに顔をうつむかせている。背中ofダーインはカタカタ震えて……………こいつ笑ってるな？

しかし貴瀬え……………。お前、鈴蘭を確保したかったからってそこまでするかね。いや、さすがに里親とヤンキーは無関係だろうが。

「やっぱり……………。ごめんなさいね……………」

「うん、なんかもう……………すまん、ごめんなさい」

「いやっ!?!みーこさんと朝夜が謝ることではないような気がするんですが!?!」

「いや、でも……………なあ?」

『その程度じゃまだまだだろ』

「……きつとこれから、もっと大変なのに……」

「……………」

そうなの？

と言いたげなアイコンタクトを向けてきたが……返事のしようがないので、華麗にスルーしておいた。

……いや、マジですまん。おかず分けてあげるから。それで耐え抜いてくれ。

「彼女が昨日、新しく我々の仲間となった吾川鈴蘭君です。はい、挨拶してー」

「吾川鈴蘭です……よろしくお願いします」

「いえーい！ヒューー！」

ドンドンパフパフ、シャラシャラシャラ。

昨日の教室風の部屋にて、オリエンテーション開始。

反応したのはでんでん太鼓を右手で回し、風船がついたラツパみた
いなやつ（名前知らない）を左手で鳴らして囃し立てる朝夜と、
朝夜に渡されたタンバリンを持ったままにこやかに拍手した、黒板
の横に控えたみーこだけ。

「はい、じゃあ鈴蘭君も席に着いてー」

昨日と同じ格好の貴瀬に促されて鈴蘭は着席。その左は背が足らず
口より下が机に隠れてしまっている青っぽい黒髪の幼女　　リ
ツプルラツプル。朝夜はそのさらに左隣だ。

右隣には無気力な表情でぽーっとした、迷彩バンダナを頭の後ろか
ら右目に巻いた癖っ毛の少女　　沙穂。

「えー。ではー。オリエンテーションです……というかな、早
い話が座学だ。しつかり学べ」

「はい」

「ウエーイ」

『グゴー……』

まともに返事を返したのは鈴蘭だけ。朝夜はでんでん太鼓とラツパ
を捨てて、足を机の上に乗せて手を後ろで組んで欠伸。やる気なし。
ダーインはすでに寝ている。

「しかし、だ。僕から一方的に言ったのでは頭への入りも悪いだろう。鈴蘭、会社についての疑問があれば言ってみる」

「はい……えっと……悪の組織ってどういうことですか？」

「語感のまま思え」

「答えになってないぞー」

「そう言われてもだな。悪の組織だぞ？他にどう説明しろというのだ？」

「……じゃあ、世界征服とかするんですか？」

「お、いいねその発想。俺好きだわ」

ポチッ（貴瀬が教卓のボタンを押す音）

ざばーっ（大量の水が朝夜と鈴蘭の上から降ってくる音）

「ずおおい！？何すんじゃあ！？」

「バカか君たちは？そんなことが可能ならばとっくにやっていると」

「しかもやるのかよ……」

「可能ならば、だ。まあ、詳しく言えば　いや、君にはまだ、知る資格がない」

「ハア……………」

資格ねえ…………まあ、割りと近い内に得られるだろうけどな。

「他に質問はあるか？鈴蘭」

「んーと…………二十億円稼げる状況っていうのは？」

「ああ、あれか。そうだな…………君はファンタジーというものがわかるか？」

ざっと思いつくのは、ドラクエとかFF、ロマサガもありだな。デイスガイアも。

「…………ゲームとかなら」

「それでいい。ゲームでもマンガでも結構だ。そうした物理法則を超えた不可思議な話が現実にある、と考える。魔導力が支配する世界だ」

「へ？」

貴瀬が黒板に地層のような横線を引いていく。

「今まで君が生活していたのはここ。つまりは世間一般だ」

一番上の層をチョークで、カツカツ。

「暗殺者やスパイが暮らしているのがここ」

二番目の層を、カツカツ。

「映画などという裏の世界だが」

貴瀬はさらにその下をチョークで叩いた。

「これから君が生き延びていくのがここ。つまり世俗を離れし、魔喰らい魔に食られる闇の世界だ」

「? ? ?」

あ、理解できてないな。

「みーこが浮いたりダインスレイブが言葉を解するのは、この間の世界の話だ。つまりそこで生き延びていく君は、あの程度は常識としておかなければならん。スイッチを入れれば電気が点く、蛇口をひねれば水が出る、アクセルを踏めば車が走る……同じように、みーこは浮くしダインはしゃべる。いや、僕たちが浮かない、もしくは普通の剣や武器がしゃべらないと言い換えても通用する」

みーこが困ったような表情を浮かべる。ダインはまだ寝ている。

「いえ……でも……ええ……?」

「鈴蘭、貴瀬あれで大真面目だから。バカっぽいけど」

ポチツ（貴瀬が教卓のボタンを押す音）

ガツンガツン（金ダライが降ってきて鈴蘭と朝夜に直撃する音）

ガツン（跳ね返ったタライがリップルラップルの頭にぶつかる音）

「ったああああ……い」

「ぐおおおお……!」

涙目の鈴蘭と直撃した部分を押さえて悶えている朝夜の間できよと

んとしたリップルラップル。そしてどこからともなく取り出した金
属バットを投擲して貴瀬の額に直撃させた。

「ぎゃあああっ！な……なにをするっ！」

「痛いの」

「痛いのは僕だポケッ！」

ドガアッ！（リップルラップルの投げた金ドライが貴瀬の額に命中
した音）

ドスッ！（朝夜の投げたダーインが貴瀬の頭のすぐ横の黒板に突き
刺さる音）

「口答えは、よくないの」

「でひゃっひゃっひゃっ。次はねえぞコラァ」

「……す、すみませんでした」

『……うおい、なんで目が覚めたら壁に突き刺さってたんだ？』

冷や汗かきながら壁に刺さったダーインをチラ見して謝罪してくれ
た貴瀬。

「まあ、よしとしておくの。以後、気をつけるの」

「リップルラッフル様に感謝しろよコンチキショー。あ、みーこソイツ抜いとして」

「は、はい」

一番動揺したのはみーこだけだった。

「……と、とにかくだ。話が逸れたが……生き延びられればいくらでも目にするができる話だ。そうした概念があるからこそ、我々は表側の世界で優位に立っている。奴らもな」

「奴ら……?」

「……偽善詐欺組織、神殿協会」

朝夜が苦虫を噛み潰したような表情で言い、鈴蘭はあつと声を上げた。

「あの下らん詐欺師集団すら人心を支配できる。つまりは、君でも二十億を稼ぎ出せる状況だ」

オリエンテーションはまだまだ続く。続いては研修である。

窓の黒い、大仰なリンカーンに乗ってやってきたのはとある埠頭だ。何故か鈴蘭が運転席。朝夜は助手席だ。まさか素人にそのまま運転させる訳にはいかないので知識はある（運転したことはない）朝夜が細かい指示を出している。

最初は四苦八苦していたが、もともと要領がいいのか、今では落ち着いて運転している。

「（へブンスゲート……）」

何気なく窓の外を見た先に目に写ったのはぼんやりとした青い光。

これが最近世間を騒がせている、へブンスゲート……神がくぐると言われている扉だ。

下らない、ああ、実に下らない。神ごときに浮き足だっていられる人間たちの考えが何一つ理解できない。

神なんて所詮は信仰やお供え物とかしている人間に対して何もしないのだから。敬うだけ無駄だというものだろう。人はなんでそれに気付かない？

……なんで、母さんを助けなかった？神よ。

「……………朝夜？どうしたの？」

「んー？あー……………空からイヌミミ美少女が降って来ないかなー、と思ってる」

「そ、そうなんだ……………」

あれ？ひよつとしなくても引かれた？

ちよつとは自重するかね……………。

「バカ者！そこはネコミミ美少女だろうが！」

「やかましやー！イヌミミったらイヌミミなんだよ！それ以外は認めねえ！」

前言撤回！やっぱイヌミミ最高！

「ええい、何度言っても聞かん奴だ……………まあいい。それより、大分運転に慣れてきたな」

後部座席にはリラックスした貴瀬。隣には刀を抱いた沙穂。

「ハア……まあ……朝夜の指示のお陰ですけど」

『少なくともいきなり踏み込んだりすることはなくなったな』

「いつか事故るんじゃないかとヒヤヒヤした」

「うぐ……と、ところで、こんなところで仕事って……？」

あ、話題そらしやがった。

「資金の調達だ。あそこに商用貨物が停まっているだろう」

横を向いた貴瀬の視線の先には、幾つもの倉庫。その内の一つにワゴン車と車体も窓も黒い高級車が数台。サングラスの男二人が倉庫の入り口の前でこつちを見ている。

「何？ヤクザの取引現場か何か？」

「概ね正解だ。あの中では現在氷砂糖の売買が行われている」

「へ？」

「はあ？氷砂糖？」

「非常に希少な氷砂糖でな。一欠片だろうと、末端にすれば数百万にもなる代物だ」

「へえ……おいしそうですね」

「くくっ、いいぞ鈴蘭。一口すれば空を飛ぶ……まあそうだったものだが、奴らには過ぎた代物だ」

空を飛ぶ氷砂糖？……ああ、なんとなく読めた。ってか、何させる気だ？ かつさらってこいとかか？

「今回は恐らく、五千万前後の金が動いているだろう」

「ハア」

「かつさらって来い」

大当たりだよ。

「……………」

「あの……どつちを？」

「根こそぎじゃね？」

「根こそぎ、だ」

「それって……悪いこと、ですよねえ……………」

「君が今いる会社はなんだ？」

悪の組織です。

「タダじゃ済まなさそうだけどなー」

「悪の組織がチンピラ風情を恐れるな。相手はたかが人間だ、真っ向から切り込んでやれ」

鈴蘭も人間だろ、というツツコミは止めておいた。エアリーディング3級は伊達じゃないぜ！

「どうした？君が稼ごうとしているたかが数パーセントが動くだけだぞ？それとも研修でリタイヤするか？だったらこのまま警視庁まで車を走らせる。並のオマワリじゃあ君の顔など知れてもいない。死にたいならそのダッシュボードに手榴弾がある。どちらにせよ、僕は二十億円分楽しむ」

「へー、どれどれ？」

試しにダッシュボード開けると、確かに手榴弾が入っていた。それもゴロゴロと。

それを見た鈴蘭が助けを求める目でこっちを見てきたが……いかん、

小動物チックで可愛いな。これでイヌミミがついてたら

「……………（ジーツ）」

「な、何…………？」

「抱き締めていいですか？」

「なんで!？」

「ああゴメン、ちょっと意識飛んだ。まあ、俺の時よりは大分簡単だから大丈夫だって！」

「…………朝夜の時は何したの？」

「ちょっとギャングをM134ガトリングでぶち殺した」

「ぶち殺つ!？」

「ああ、弾はゴム弾だったから大丈夫。多分死んでない」

「多分って…………」

「ちなみにM134ガトリング、通称ミニガンはターミネーター2でターミネーターがビルの中から警察の群れに向かってぶっぱなした機関銃。よくバルカンとガトリングを統一させて考えてる奴とかいるけど、バルカンってのはM134を大型化したM61ガトリング砲の製品名であって銃器の種類名じゃなかったりする。まあ、英語圏内でもガトリング砲全般のことをバルカンカノンなんて呼んで

るらしいから、あながち間違いとも言えないけどな」

「へー……」

「相変わらず無駄知識だけはよく蓄えてるな」

「無駄知識って言うな！豆知識って言え！」

『あんまり意味変わってねえぞ』

「マジで!?!」

「おい、もう面倒だから話を進めていいか？」

「面倒って言われた……」

なかなかシヨックだった。

「朝夜の無駄知識はどうでもいい。それよりどうするんだ鈴蘭。かつさらって来るか、リタイアするか、爆死するかは君の勝手だが？」

無駄知識じゃねえよ……豆知識だよ。もしくは^{うんちく}蘊蓄でもいいけど。

「……沙穂ちゃんか朝夜もいつしよにい……とかあ……」

「連れて行っても構わんが、それだとオリエンテーションにはなら

んな」

「……ですよねえ」

「沙穂の場合は惨劇。朝夜の場合は状況がより厄介になる可能性が大だ」

「これ以上の厄介って……?」

「朝夜、君ならどうする?」

「囿役が気を引いてるあいだに組長とかボスっぽい人の股間を蹴り上げて一気にかっさらう。もしくは玉ねぎ爆弾投げ込んで全員涙と鼻水とせきで苦しんでるところでボスっぽい人の股間を蹴り上げて一気にかっさらう」

『バーカ! こういうときは皆殺しに決まってるだろ! 全員まとめて首チョンパだ!』

「だ、そうだ」

「行ってきますうっ!」

「あれ? ダーインはともかく俺の案はまだマシだったよな?」

ドアを開けて出ていった鈴蘭だが、やっぱり怖いのか、すぐに戻ってきたが、貴瀬が楽しそうに手榴弾をちらつかせているのを見て、とぼとぼと歩いていった。

進んでも死亡、戻っても死亡。それなら進んだ方が幾分かはマシだ。

「上手くいくのかねえ」

「あのエプロンドレスを着ているのだ。ちょっとやさそつとでは死な
んだろう」

「……首から上とか膝から下は？」

「知らん」

「うおい……あ、入っていったぞ」

『俺には連れ込まれたように見えたぞ。死んだらおもしれーのに』

「しかも律儀にも見張りのヤクザと何か話していたな。悪の組織の
構成員としては落第点だな。有無を言わず顔面パンチでも喰らわ
せればいいものを」

「お前ら無茶ぶりって言葉を知ってるか？」

「存在しているのは知っているが？」

『無理、無茶、無謀はしてなんぼだろ！ピギヤハハハハハ！』

「すまん鈴蘭。俺にこの暴君を止めることは不可能だ……」

数分後。

「いいいいいやあああああああ！！！！」

「なんかすごい勢いで戻ってきた!？」

流石陸上部。かなりのスピードで鈴蘭が倉庫から飛び出してきた。

それでも左手にはスニーカー、右手にはジュラルミンケースと、律儀にもミッション遂行中だ。

「朝夜あつ！キャッチ！」

「は？つてうお!？」

開けっぱなしにしておいたドアからスニーカーとジュラルミンケースが投げ込まれ、助手席にいた朝夜がなんとか二つともつかんで膝の上に置いた。そして鈴蘭自身も飛び込んでくる。

「かっかかかかか覚醒じゃないじゃないですか！覚醒じゃないじゃないですか！大陸系のキムさんがナントカ会のワカガシラと！」

「鈴蘭落ち着け！カミカミになってるぞ!？まずは落ち着いて深呼吸だ。ヒッヒッファー、ヒッヒッファー」

「ヒツヒツフーヒツヒツフーってそれラマーズ法でしょ!？」

「ノリツツコミだと……!？」

以外にツツコミスキルが高かったらしい。

「何を漫才しているのだ君達は……いいから踏め。死ぬぞ」

エンジンはかけっぱなしだったので、鈴蘭はアクセル底突きで踏む。

「まままま窓が!?! ドアがばちばち言ってますけど?!？」

「くくっ、このリンカーンは大統領専用車と同種の防弾仕様だ。豆鉄砲など気にするな」

「すすすす……すごいんですか!？」

「パンクしようが地雷を踏もうが走れる。さすがに核ミサイルへの直通回線はついていないがな」

「貴瀬がそんなもん持ってたら怖いっての……」

「追ってきます追ってきますうっ!」

「追い付かれても問題はない」

「へ？でもさつき死ぬって……」

「奴らかな」

ニヤニヤ笑う貴瀬の隣では、刀を持った沙穂がそわそわと貴瀬を窺っていた。あ、うん。確かに死ぬな。バラバラになって。

「とはいえ鬱陶しいのは確かだな……よし朝夜」

「あい？」

「殺れ」

「イエッサー」

「へ？」

貴瀬の指示を受けた朝夜が窓を開けて腕を外に出す。その手にはいつの間にか一丁の銃器が。

H & amp ; K G 3 6。ドイツのヘッケラー & amp ; コツホ社が開発してドイツ連邦軍で正式採用されている 5 . 5 6 m m 口径アサルトライフルである。

それを、ヤクザの真つ黒い車に向けて。

「Y a a a H a a a ! ! ! !」

たたたたたんっ!!

撃った。

弾はヤクザの車のタイヤに見事命中。一台がスリップしてあとは玉突き事故よろしく全車巻き込んで大クラッシュを起こした。

「あ、あわわわわ……」

「ギャハハハハハ！いいぞ朝夜！見事にストライクだ！やはりこうでなくてはなあ！」

『ピギャハハハハハ！みんな吹っ飛んでやがるぜ！あー、面白ねー』

「ハレルヤh a l l e l u j a h ! ホントはR P Gとか撃ち込みたかったけどな！」

「いいいいいいいんですか！？あんなことして!?!」

「相手はたかがチンピラだ。くたばろうと世間のゴミが片付けられたとも思っておけ」

「え、え………?」

「鈴蘭鈴蘭。こつこつのは慣れとくのが一番だぜ？でひゃっひゃっひゃっ！」

絶対に慣れたくない！と思った鈴蘭であった。

「ふ……振り切りましたよね？」

「あれだけの大事故を起こしたのだ。振り切れない方がおかしいな」

「ちゃっかり”事故”って言うてる辺り貴瀬らしいなー。まあ代わりにお巡りさんに追われてるけど。あいつらもストライクしとく？」

「絶対にやめて！」

バチバチ音に代わってサイレンの音が聞こえていた。鈴蘭も無意識に慣れてしまっているのか。割と落ち着いている。

「あのー……ところで私……撃たれたんですけど……血とか……出てないんですけど」

「よかったじゃないか」

「ハア……いえ、なんででしょう？腕とか背中とか、びしっ、ていつてたんですけど」

「そのエプロンドレスにはマジックコートインゲ魔導皮膜が施されている」

「へ？」

「ようするに闇の世界の特殊な技術でな？生半可な攻撃はまず通らない。俺のスーツも同じ加工されてるし」

「チンピラ程度の武装では切っても突いても破れはしない。僕たちがいる世界の、世俗に対する優位性とはそういうものだ」

「わあ、すごい！」

「すごいだろ？けど鈴蘭の運がよかったってのもあるけどな。顔とか足とか丸出しだし」

「へ……？あ、あの、ご主人様……？」

「鈴蘭。よかったじゃないか」

「もついやああああっ！」

Act・2 空飛ぶ氷砂糖、後にストライク（後書き）

ダーインが空気になりきみだなあ……。

感想待っています。

Act.3 ヒーローよりダークヒーローの方が人気が出やすい

(前書き)

どうもギザです。

長い……。クラリカってこんな感じでいいんでしょうか？

駄文ですが、読んでみてください。

Act・3 ヒーローよりダークヒーローの方が人気が出やすい

深夜。草木も眠る丑三つ時。

自室でパソコンに向き合ってバットエンド回避している最中にいきなりインターホンが鳴り響いた。

最初は無視していたが切れずに鳴り続き、さすがに鬱陶しくなったので机の上のインターホンを手に取った。

「只今電話に出ることができません。ご用件のある方はピーっとなる前にメッセージをどうぞピーッ。はい終りよー」

《馬鹿言っでないですぐに着替えて門まで来い。デカイ仕事だ。制服を忘れるなよ。あと仮面を別の奴に変えてこい。急げ》

そこで一方的に通話が切れる。

「ふーん？冗談抜きっぽいな。……なんか仮面あったっけか？あ、あれがあった」

クローゼットから別の仮面を取り出して、即効で付け替える。イメージはラウ・ル・ルーゼさんだ。

そして爆睡していたダーインを蹴り起こして部屋を出た。

ランボルギーニ・ディアブロ。1990年にランボルギーニ社が発売を開始した二人乗りのスーパーカーである。ちなみに車名のディアブロの意味は【悪魔】。

そのディアブロが、とんでもないスピードで深夜の高速道路をすっ飛んでいく。あのドライブテクは貴瀬か。助手席では鈴蘭が固まっているだろう。

いつもの黒スーツにフルフェイスヘルメット、更にその下にはクレーゼ仮面というアンバランスさ全快の格好の朝夜はそのディアブロのピタリ後ろを赤いバイクで着いていく。ダーインはディアブロの方に乗せておいた。

カワサキ・ニンジャZX-12R。開発当時、ノーマルの状態で三〇km/hオーバーを達成する世界最速の市販車として知られていた、スズキのGSX1300R八ヤブサから世界最速の座を奪取すべく開発された大型自動二輪車だ。

最高速度で三〇〇？は出せるが、向こうが二四〇キロほどで走っているのだから合わせている。どのみちとんでもないスピードだが。

《あの……いま、何キロぐらい……》

《たかが二四〇キロだ、気にするな。世俗のホンモノどもは僕なんかよりもっと早いぞ》

耳にはめたインカム（兼盗聴機）から聞こえてくる会話に耳を傾けつつ（よい子は真似するなよ！）ディアブロの後を追う。

その時ディアブロが急ブレーキで進路を変えた。その先には料金所が。

そして、そのままの速度で……。

《いいいいやあああああああ！？》

「ヒヤッハーーーーッ!」

抜けた。針の穴に糸を通すかのごとく。もちろん朝夜のZX-12 Rも後に続いて抜ける。

「無茶苦茶だなおい！まあこういうのは大好きだけどね！」

《クククツ！それは何よりだ！遅れるなよ朝夜あつ！》

「当然だポケコリアツ！俺を誰だと思つてやがる!？」

《ご主人様っ!？ご主人様あああッ!？》

《楽しいからってそうはしゃぐな鈴蘭！今回は急ぎなのだ！》

《楽しくないですから！？寧ろ死にそうな思いしてますからあつ！
というか今日の仕事って何なんですかつ！？》

「俺にも教えるコノヤローっ！でひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっ！」

《正義の味方の邪魔をすることだ！》

………なんですと？

「正義の味方ってどういうことだコノヤロー」

《悪の組織と対立する者が他にいるか?》

「仮面ライダー。いやプリキュアか?」

《違う》

「……はっ!? ロボコップか!」

《古いわっ! 貴様一体何歳だ!?》

「16歳」

なんてやりとりしながらやって来た霧の深い峠道をスピードを押さえて登る。

《とは言え、だ。特撮系のサイボーグやポリマースーツの戦隊とは少し違ってな。古式ゆかしい歴史を持つ厄介な連中だ》

「貴瀬! 変身魔法少女を忘れてるぞ!」

《やかましいわ! 君は黙っている! 話が進まん!》

いや、主人公が喋らなかつたらこの小説意味がなげぶんげぶん何でもありません。

《……それも、闇の世界の人たちなんですか？》

《そうとも。だからデカイ仕事だと言っただろう。魔を喰らうエキスパート……いや、連中はもつとタチが悪いな。喰いもしない。ただ葬り、古くにはそれによって世俗を先導し続けてきた……そういう連中だ》

「そう聞くと無茶苦茶イメージ悪くなるな」

「つてか、母さんも正義の味方だったんですけど？」

《そんなのが、正義の味方なんですか？》

《そうとも。”勇者”だ》

砂利の敷かれた路肩に停まったディアブロの隣に自身のZX-12Rを停めて、ディアブロの車内を覗きこむ。

「あの……ご主人様」

「なんだ？」

「バカじゃないですか？」

「ぶふうっ！」

「じつ。じつんじつんじつん！」

「きゃあきゃあきゃあきゃああつ!?」

「いいかよく聞けこのクソバカ給仕が！なんだったら僕も不本意ながら貴様のその貧相な身体を二十億円分たあああああつぷりと辱めてやつてもいいのだぞ!? 見ろ！朝夜が外で笑い転げているではないか！」

「あはははははっ！ちょ、ちょっと待……！ツ、ツボに、入っ……！」

や、ヤバイ……腹が痛い……！腹筋が痙攣を……！

「ごめんなさいごめんなさいもう言いません！もう言いませんけど
おー！」

「けどなんだ!? まだ口答えするか!？」

「しませんしません！ただ、勇者って……それってひょっとして神
殿協会と関係が……?」

「す、鈴蘭……！それ正解……！ぶっ！くはは……！」

「君もいつまで笑っているのだ」

「い、いや、だって……！」

い、いかん。力が抜ける……！ゲホッゲホッ！

「ぜえ、ぜえ……よし、おさまった……で、勇者ってのは確かに神殿協会所属の……なんつーの？一人遊撃部隊みたいなもんで、数は少数だけど世界中散らばって世界の平和を守ってるんだよ。そのうちフェリオールみたいなマスコットの扱い受けるだろうけど」

フェリオールというのは巷の女子中高生に人気の神殿協会のイケメン司教だ。誰が呼んだか”ふえりっ君”のあだ名で親しまれている。

「ふええ……そうなの？じゃあ……今までの流れからして……魔王とかもいたりして？」

「いない」

「それは聞かないな」

「……ですよねえ」

「ああ、魔女ならいるけど」

「いるの……？」

「屋敷の地下に引きこもってるけどな。会わない方がいいぞ。妙な実験に付き合わされる可能性があるし」

「あの蛇女のことはどうでもいい。とにかく勇者はいる。そこを登った展望台にな」

貴瀬の指した方には木立に挟まれた階段。遊歩道のすぐ脇にオートバイが停まっている。

……確かに強めの”魂”がいるな。あれ？この”魂”どっかで見たことあるな。どこだっけ？

「で……あの……何をすれば？」

「一発かましてやれ」

どき、と鈴蘭の膝の上に一丁の拳銃が置かれた。おいおい……。パイン・357マグナムかよ。

「でっ、ででできませんん！ひひひっひひっ人殺しなんんかかかかか……！」

「貴瀬。そっいつ役目なら俺が殺るって。九割殺しに留めるけど」

”千人目”は決めてあるしな……。

「馬鹿を言うな。相手は勇者だ。その程度で死にはせん」

「へ？」

「貴様のようなクソバカ給仕がああ、の弾幕で死ななかったのだぞ。むしろ殺せるものなら殺してこい。こっちとしては大助かりだ。あと朝夜。君の九割殺しはあてにならない」

「え、なにそれ酷」

「で……も……」

「仕留められたら二十億をチャラにしてあの屋敷を譲った拳句、僕が執事になってその靴にキスしてやろう……待て朝夜。デザートイーグルなど持ってどこに行く」

「いや、別に勇者ヌツ殺して屋敷頂こうなんてオモッテナイヨ」

「嘘つけ！思いつきり頂く気満々だろう！あと仕留められたとしても君にはやらん！」

ちいっ！なぜバレたし！

「ってか、そんなに無謀なことか？」

「黙れ。君はもしもの時の保険だ。鈴蘭と一緒にいけ。もし勝手なことをしたら鈴蘭専属の執事に任命してやる」

「いいじゃん。むしろ光栄だね」

「そ、そうかな？えへへ」

「屋敷にある仮面を全て破壊した上で、だが？」

「よし行くぞ鈴蘭！勇者だろうがライダーだろうがぶち殺す！」

「え、えええっ！？」

「そんなに外したくないのか……？」

「うるせいやい！こんなグロ顔さらすくらいなら死ぬわ！」

そう言ってトランクに入れておいたダイーンを取り出しにディアブ
口の後ろに周る。

《そんなに酷い顔なんですか？》

《いや、素顔のまま街中を歩いたら間違はなく十人中十人が振り替
えるぞ。無論いい意味でな》

《じゃあなんで？》

《いわゆる対面恐怖症というやつらしくてな。他人と顔を合わせる

ことが出来んとのことだ。まあ単純に恥ずかしがっているだけかも
しれんがな》

「聞こえてるぞお前ら……！」

インカム越しに聞こえてきた会話に同じくインカム越しにツッコミ
をいれてトランクを開けてダーインを取り出す。

『遅えぞボケナスツ！暇すぎて溶けちまうところだったじゃねえか
コラアツ！』

「え、溶けんのお前？」

『溶けるわけねえだろバーカ！バーカバーカ！』

「誰がチルノだ！ほら行くぞ！鈴蘭もだよ！」

「え、ちょっ！まだ心の準備が……！」

ダーインを背中にくっ付け（原理は不明。何故かくっつく）、鈴蘭
をディアブロから引っ張り出して勇者退治に繰り出した。

「くそっ……急がないと！夜が開けてしまっ！」

少年は叫んだ。霧が濃いせいでシルエイト程度しか判別できないが、声質からして高校生ぐらいだろう。

「ふっ！はあっ！……たあーっ！！」

持っているのはやはり剣。両刃の、まんま洋風の武器である。

「俺は、今日こそレベル二十になるんだっ！」

ということは今レベル十九か。中ボス倒すにはやや心許ない。

「（あれ、俺の今のレベルなんだっけ）」

「うおおおおっ！」

気合い高らかにシャドウボクシングならぬシャドウ剣術を繰り返す少年。うん、速い。だが……。

『ケツ、ただの雑魚じゃねえか……とっくと殺っちまおっぜ』

「殺るのは俺じゃなくて鈴蘭だったの……鈴蘭？どこに電話かけてんの？」

鈴蘭は貴瀬から渡されていた携帯でどこかに話していた。

「……………あ、もしもしご主人様!?」

《どうした?》

「バカです!バカがいますっ……………!」

《……………》

「なんか、一人で叫びながらチャンバラゴツゴ……………!」

「うわ、それ聞くとすげえバカっぽい」

《だから。そのかわいそうな脳天でも後頭部でも股間でも一、二発ぶち込んでやれ。急げよ》

っーっ、っーっ、っーっ……………。

切れた。まあ鈴蘭の言ってることも正しい。レベル上げしたいならチャンバラよりモンスター倒したり、自分より強い奴に鍛えてもらった方が手っ取り早いだろう。

朝夜の場合は魔法面ではエキドナに、剣術面ではダーインに直接教えてもらっていた。

……いや待て。エキドナの方はともかく、ダーインの方は絵面的にはあの勇者と対して変わらないような……？いやいや気のせいだ。そうに決まってる。

「……と、とにかくやっちゃおう。一発撃てば終わりだもんね……」

「撃つた後は全力で逃げるか。捕まったら面倒だしな」

近くに他にも誰かいるっぽいしな……。

「一撃のお……ひいつ殺う……！」

「あ、鈴蘭。反応には気をつけ」

ぱんっ！！

朝夜がいい終える前に、鈴蘭は勇者の動きの止んだ一瞬を狙って弾丸を放った。

しかしその反応は凄まじいもので、少女の身体はそのまま後ろへ倒れ、そして。

「あれっ？っおわっ！きゃあああっ！？」

「鈴蘭っ！」

階段を転がって行った。すぐさま朝夜も追いかける。

先ほど通り過ぎた踊り場でようやく転げ終わった鈴蘭を抱き起こす。

「いったー……たた……」

「大丈夫か？だから気をつけろって言ったんだよ」

「うん、ごめん、ありがとう」

「危ないっ……！」

「あー？」

少年の声は唐突。朝夜が気の抜けた返事を返した瞬間。

「へ？え？あぐっ！？」

不自然に流れていた霧が鈴蘭の胴体を締め上げた。そのまま体は浮き上がる。

「がっ……かはっ……！」

……ミストゴーレムか。

（死ぬ？わたしっ……）

朝夜がゆっくり立ち上がり、見上げ、締め上げられている鈴蘭と、締め上げている霧の巨人の姿を確認する。

四方八方からの圧迫に押し潰され、息ができない。吐いたら、次が吸えない。

万力のごときその力は、到底少女の力でほどけるものではない。

（あ……死ぬんだ……。悔し……）

意識が朦朧とする中、鈴蘭はこちらを見上げている朝夜の姿が視界に入った。フルフェイスヘルメットのおかげで表情は窺えない。

彼にこの霧をどうこうする力があるのかはわからない。しかし鈴蘭は、無意識に助けを求めている。

「がっ……あっ……た、助……て……！」

瞬間。

「なに、してくれてんの？お前？」

殺気が場に充満した。

しかしそれは一瞬。すぐさま殺気は巨人一体に集中的に叩きつけられる。

尋常じゃない殺気に充てられた巨人は、震え、手を離し、少女の身体を落とし、朝夜がお姫様抱っこで受け止める。

「はあああああっ！！！」

次の瞬間。山間から朝日が昇ると同時に人影が矢のように駆け抜けた。一閃。

巨人が霞み、消える。

「大丈夫か!？」

着地して一息した勇者が問うてくる。

「大丈夫だけど……もちつと早く来いよ。おかげで一人死にかけたぞ」

「あ、ああ。すまない。何より無事で……って、その子!？」

「まったく……おい、鈴蘭。大丈夫か？」

「……ごほっ、けほけほ……!」

鈴蘭を確認した勇者の反応が気になったが、ひとまず無視して未だ朝夜の腕の中で眠る鈴蘭を軽く揺すって起こす。

意識を覚醒させた鈴蘭は薄目で辺りを見渡す。

「あれ?私……」

「霧の巨人っぱいのに締め上げられているところをそのの勇氣ある少年Aが助けてくれたんだよ」

「そうなの……？あ、助けていただいて……」

鈴蘭と、勇者の目が合う。

「……吾川？」

「へ？」「は？」

「ひょっとして、一年の吾川鈴蘭じゃ……？」

「……せつ……先輩iiiiiiiiっ！？」

「えー……？お知り合い？」

鈴蘭の悲鳴じみた声は銃声並みに、よくよく、山に木霊した。

「あ、あの……とりあえず、降ろしてくれる？」

「えー？俺としてはもうちょいこのままがいい。（それより鈴蘭、どちら様？）」「

「（えと……私の高校の先輩の長谷部翔希先輩）」「

「（なんで鈴蘭の高校の先輩が勇者やってるんだよ……？）」

「（私に聞かれても……）」

とりあえず、勇者の方に目を向ける。対して勇者はこちらを軽く警戒している。殺気は踊り場一帯に留めといたから、感知はされていない筈だが……。

健康的な美少年。きりつと引き締まった眉、真っ直ぐな鼻筋。優しさの絶えなさそうな黒い瞳。確実に同年代とからモテそうな容姿だ。死ねばいいのに。

「（そんな先輩が……）」

「（んー？）」

「（バカだったなんて）」

「（鈴蘭よく見る。正直俺らも大差ないぞ？）」

「（へ？）」

朝っぱらの山の中で、片や拳銃片手にメイド服。片や黒スーツにフルフェイスヘルメットに背には長剣。怪しさ全開だ。

すごい。すばらしい。否、スサマジイ。

「（ほ、ホントだ……）」

「（だろ？そして言い訳すべき存在は目の前にいる。さてどう説明したもんか）」

「（どーしよー。どーしよー……）」

「……吾川のことはともかくとして……アンタ何者だ？」

あれ、こっちに話振ってきたよ。何て言おう？死神なんて言えないし。

「一応そっちのが歳上らしいんだけどな。まあなんだっていいや。

俺は、この子のお世話係みたいなもんだわさ」

「お世話係……？」

「それより少年はこんなところで何を？」

話題をそらす。

「それは……そっちこそ、なんでこんな所に？」

ちっ、聞き返してきやがった……質問に質問で返すのは相手に失礼

だと学ばなかったのか？

「……吾川の持つてるのは、ピストル……か？」

「そっちは剣だよなー。いや、人のこと言えないけど」

相討ち。

「……………その格好は？」

「やだそんな、先輩こそ……っ!？」

「残念鈴蘭。相手は学生服だ。こっちの負け」

せいぜいおかしなところといえば、頭に巻いた鉢金くらいなものだが、その程度ではヘルメットで簡単に相殺できてしまう。メイド服に黒スーツほどのインパクトはない。しかもヘルメット取ったとしても、クルー 仮面があるし。

「えっと……そう、そんなことよりあの白い巨人は!？」

スズランの キシカイセイの イチゲキ!

「さて……そんなの、いたか？」

しかし ユウシャ は カイヒ した！

「いました！私死にかけましたあっ！ってかああもういやああこんな世界いつ！私死にますっ！朝夜降ろしてっ！」

「はいよー」

「降ろすなよ！？馬鹿っ！おい！わかったから落ち着け！」

欄干から飛び降りるはずだった鈴蘭は、翔希の手によっていとも簡単に踊り場に戻されていた。手の中の拳銃は抜き取られている。

「手癖悪いなーまるでスリだ」

「人聞きの悪いこと言わないでくれ……」

「いやいや俺は誉めたのさ」

翔希はすでに息を整えている。ふむふむ、ただの雑魚ではないだろうとは思っていたが、なかなか出来そうだな。

「……ふう。焦らないでくれよ。見てしまったものは仕方ないから

教えるけど……これは、絶対に内緒だぞ？」

「は、はい……」

「あれは”^{モンスター}魔物”……ミストゴーレムっていう^{ゴーレム}人形系のモンスターなんだ」

うん、知ってる。

半笑いの鈴蘭に気付かず、彼は力強く拳を握り、厳肅な面持ちで朝日へ向かった。

「そして俺は、そうした魔物から人類を守り、魔王を打ち倒す使命を帯びた　選ばれし勇者なんだ」

「あーあ。とうとうばらしちゃいましたねー」

咎めながらも楽しげな響きを含んだ女の声が頭上から聞こえてきた。声の主は弾む足取りで、展望台の方から降りてくる。

(あー……？シスター？いや、ただのシスターじゃ無さそうだ)

何度か見た覚えがあった。清楚な青の衣装に、白いライン。ナース帽を改造したような帽子には白い十字。神殿協会のシスターだ。

しかし普通のシスターは腰にモーゼルなんか挿さない。

「クラリカ……」

二十歳前後。可愛い、といった印象が残る。……だが、何人が殺してるな。軽く狂ってる。

「だめつすよー、翔希さん。こちらの不用意な発言は、こちら以上に、それを聞いた人の方の被害があります。巻き込んだじゃいます」

クラリカとやらは手にした銀の小杖を、困り顔の頬にあてる。

「知り合いみたいだから仕方ないっすけど……どちらさんですか？」

「この子は……吾川鈴蘭。俺の学校の後輩だ」

「へえー。かあわいいっすねー。翔希さんのコレっすか？」

と彼女の小指が立つ。

「ばつ、ばか。そんなんじゃない。ただの先輩後輩の……だな……な？」

気さくな笑顔を向けられた鈴蘭は、曖昧に頷いていた。

「まーまー、汝嘘をつくなかれ、ですが……ここはこのシスター・クラリカが大目に見ましよう……で、そちらの黒服さんはどちら様ですか？」

こつちに話振ってきたよ。このシスター。

「どちら様っていわれてもなー。とりあえず名前は朝夜、16歳で趣味はゲームアニメマンガ。最近ハマっているのはゾンビゲーム……えーとあと他には……」

「下手なことやって誤魔化さないでください。こちとらこの目でちゃーんと見てたんすからねー」

「何をさ」

「あのミストゴーレム、あなたに怯えてましたよねえ？」

あー……そうか。殺気は押し止めても、ゴーレムの様子は見ればわかるか。翔希の方は助けることに夢中で気付いてなかったんだろう

けど。

まあ、誤魔化しの効く範囲だ。

「　　そうかあ？俺的には勇ましく女の子を助け出そうとする勇者君に怯えてたように見えただけど？」

「ミストゴーレムくらいのランクのモンスターがレベル十九の翔希さんの勇気風情にビビるはずないっすよ。というかあのゴーレム翔希さんの方向いてませんでしたし。何をしたっすか、お宅」

「風情ってどついう意味だよ」ってツツコミが聞こえたが、二人で無視する。

「……なんにもしてないぜ？俺はか弱いミジンコレベルの一般人なんだから。むしろ俺がビビったさー」

「ホントっすかー？」

「ホントホント」

「ふーん……？」

クラリカが朝夜の周りを一週する。観察してる？

「とりあえず、そのヘルメット、取って貰ってもいいですか？」

「それは一番のお断り。俺のグロ顔にはモザイクが必要なんだよ」

「グロ顔って……逆に興味ありますけど？」

「拒否権を行使する」

「汝断ることなかれ、ですよ？」

「なにそれ、今初めて聞きましたが？」

「そりゃあ、いま私が作りましたから」

作るなよ。

「だいたいあのミストゴーレムとやらは勇者君が倒したんじゃないの？モンスター倒してレベルアップしたんじゃないの？たたたたーたーたー、たっただー みたいな感じで」

「そうだクラリカ！俺のレベルは！？」

「……あー。ダメです。ミストゴーレムは朝日を浴びて消えましたから。翔希さんの経験値にはなってないですね」

「そんな！？」

「でも、よかったじゃないですか。こうして聖なる巫女とは会えた

わけですから」

……あー？

「実は……これは極秘裏の話なんですけど」

と、前置きするクラリカ。

「鈴蘭さん。あなたには、聖なる巫女……すなわち聖女様になれる資質があるんです」

……なんだそれ？聞いてないぞ？

「ハア……そうですか？」

「テレビ、見なかったっすか？フェリオール司教が何度か呼び掛けてたんですけど」

「テレビは……見ましたけど……」

「ま、信じられないのも無理ないですね。鈴蘭さんは……韻を踏んでますね……鈴蘭さんは第一世界、って言ってもわかりませんね。」

表の世界で暮らしている人ですから」

「いや、既に逸脱しています。」

「鈴蘭さんが鈴蘭さんであることを神殿協会が突き止めたのは、ほんの数日前のことなんです。ところが、家を訪ねてみると引越した後でした。学校に聞いたら転校したってことでしたし」

「でも吾川のことは、学校で噂になっっているんだ。深夜のアパートにヤクザと喧騒だろ。現場へ向かったパトカーは途中で不審な高級外車に衝突されていて……」

えー……？

「警察が駆けつけたときには部屋はもぬけの殻。住んでいたはずの吾川が行方不明。フェリオール司教の呼び掛けを見計らったような事件だけに、俺は勇者として真相の究明に乗り出したんだ……けどな」

「ああ……レベルが足らなかった、と」

「なんでわかったんだ!？」

「いやほら、俺もゲームでレベルが足りなくて受けられなかったクエストとかあったし、そんな感じだろ？」

「そんな感じっすよ。今回のミッション……朝夜さん風にいえば、クエストにせめてレベル二十は欲しいな、と判断したわけです」

判断基準について聞きたかったが、エアリーディングしてやめておいた。

「レベルってどうやって見分けるんですか？」

「現代は便利っすよ。昔は神殿まで行って神託を受けなきゃならなかったんですけど」

クラリカがポケベルのようなものを取り出した。

「マジカライズ・インジケータ。神殿協会のもつ魔導工学の結晶です。魔導力の正負はもちろん」

なんかクラリカの目がぐるぐるし始めた。いかん。あの目はエキドナと同じ目だ。何かしらの”実験”を開始しようとするときにあんな感じになる。

「とまあこれらは全て主のなせるわざっすよ！お二人もぜひマリア教ご入信をっ！」

「いえ、あの……」

「主は、いるっす!!」

いるんだったらなんで母さん助けなかった?……いや、いたからこそ助けなかったのか?

「勇者君や、あのシスター止めてくれませんかねえ?お宅の連れっしょ」

「止められるならとっくに止めてるって……」

翔希も耳にタコができるほど聞いたのだろう。げっそりした顔で欄干にもたれかかっている。

つてか、貴瀬が助けに来ないのはどういっこっちゃ。インカムも繋がらんじ。

「お二人共信じてないっすね?じゃあまずこっやって翔希さんの方へ向けて」

と、クラリカはマジカライズ・インジケータを翔希に向けた。EX Pのこまごました数字の後に、LV19。

「へえ……」

あ、うん、よくわかってないな。

「ではでは続いては……朝夜さんに向けて」

あ、レベルを知られるのはまずいか。

ソウルプロテクト、展開

「んーっと朝夜さんのレベルは……あれ？」

「どうしたクラリカ？」

「いえ、もっと高いと思ってたっすけどねー……あっねー？」

液晶画面にはL V 3と出ていた。ふむ、まあ妥当か。

「だから言ったじゃん。俺なんてミジンコレベルの一般人だよ」

「うむむ……なんか納得できないっすけど……（ん？この妙な魔力波形、どっかで見たとような……？）」

「んー？どっただよ？」

「い、いえなんでもないっす」

小声でボソツと呟いたのは気になるが……問い詰めても仕方がないか。

「次にこう、モードを変更して鈴蘭さんへ向けると……」

マイナス、1。

「レベル1つてことですか？」

「違います。鈴蘭さんは負位置の魔力を保有しています。未確認情報ではなく、聖なる巫女として正式に認定されました」

……なんですと？

Act・4 喘げ？否、喘がせる！（前書き）

べしむもギザです。

ちょっとヒロく書いてみた。微微微微ヒロくらららら。

感想待ってます！

Act・4 喘げ？否、喘がせる！

「へ？」

「さあ、一緒に神殿に赴き、先例を受けましょう！」

やばい。クラリカの目が実験が佳境に入ったエキドナと同じくらいぐるぐるし始めている。

「で、でも私ですね……巫女って何すればいいかわかんないし……」

「何言ってるんですか！？全知全能全く万能なる我らが主をお呼びした暁には、聖なる魔神様も召喚するっす！魔物や悪党どもバンバン天に召させるっすよ！さあさあさあさあ！神威による魂の浄化で永劫の愛と平和を！」

宗教関連の人もここまでくると病気だな。母さんみたいなまともなのは少ない方なのか？

「もうよせ、クラリカ！」

鈴蘭の前に翔希が割って入った。

「……勇者君や、今の話本当か？」

「……そうだな。アンタにはわかるかも知れないけど、バカと思っ
てくれてもいいさ。でも全て本当のことなんだ。そして俺は……吾
川を危険な目に遭わせたくない」

「……危険な、目……？」

「君はまだ覚醒していない。だが洗礼を受けて覚醒しても、聖なる
巫女になれなければ君は魔王に……」

「……魔王、だと？」

朝夜の声にあつ、と悔やむように息を呑んだのは翔希。驚きの表情
で口を押さえたのはクラリカ。

朝夜は鈴蘭の方に顔を向ける。鈴蘭は半笑いのままだが……。

こんな子が、魔王に……？

「……いや、みんな冗談さ。つまらないだろ？できれば忘れてくれ」

……それで忘れられたら苦勞はしないぜ？勇者。

「そんな！翔希さん、ここまで来て！」

「いいかクラリカ！今は君の言うような太古じゃない！モンスターだつてレベル上げに苦労するほど少ない！こんなか弱い子に世界を託す必要がどこにある！？まだ魔王は現れてないんだろ！？他に方法はあるはずだ！」

「でもこうしてる間にも魔王の勢力は力を蓄えてるっす！一刻でも早く主をお呼びしないことには、世界は破滅への一方っすよ！」

鈴蘭、現実逃避して羽ばたく小鳥を眺めるのは構わんけれども、こいつら結構重要な話してるからな？

……あれ、貴瀬の魂、めっちゃ近いところにいるじゃん。いつの間

に。

「世界の、数十億人も幸せがかかってるっすよ！」

ぱん、と乾いた音に振り向くと、翔希がクラリカの頬を叩いた音だった。

「翔希さん……？」

「……すまない。でもたった一人でも、誰かが犠牲になるようなやり方……俺は間違ってると思うんだ」

「くくっ、そうか」

貴瀬の声は唐突だった。

欄干の外。崖の茂みから飛び上がってきた貴瀬は空中で木の葉を振り払い、朝夜と鈴蘭の側に着地する。貴瀬さん？アンタどうやってんな所に隠れてたんですか？

まあともかくとして……。

「朝夜！」

「はいはーいっと」

「へ？うわっ！？」

鈴蘭の手を掴んで引き寄せて腕の中に納める。

翔希は剣を構え、厳しい表情で貴瀬を睨んでいる。

「伊織っ！貴様なぜこんなところに！？」

「久しぶりだなクソガキ。レベルは上がったか？んん〜？」

「黙れっ……いや、なぜそれを知っている……?」

「なぜだと?」

そう聞き返した貴瀬は鈴蘭のカフスの止め具を外し……そして耳にはめた補聴器のようなものを取り外す。盗聴かい。

「よくやった鈴蘭、朝夜。レベル上げは阻止できたようだな」

「え?あ。はい……」

「あ、そういう任務だったんか、これ」

頷く鈴蘭と納得する朝夜。

「そんな……まさか!吾川!君はそいつが何者か知っているのか!」
「?」

「その通り!。鈴蘭は借金返すためにわが社で働いております」

「そういうことだクソガキ。僕と鈴蘭は主従の関係……すなわちそういう関係になったのだ」

(うっわ。やな言い方だなあ……)

「まあそついでとことで……ちょっと失礼。嫌ならぶん殴ってくれていいから」

「へ？ひゃっ！？」

朝夜の手がエプロンの下に潜り込む。もう片方の手は頭を撫でる。

ぐっ……手のひらに伝わってくる心臓の鼓動が生々しい……。

「え！？あの！？朝夜！？……ええ！？」

「……以外にあるじゃん。79・5ってどこか？」

「ぶっ！？」

あれ？ドンドロシヤ？

「あ、あそや……？」

「……いや、マジですまん。後で何してくれてもいいからちょっと我慢して」

「鈴蘭。誰ぞ」

「は……？」

いきなり凄いことを小声で言った貴瀬の方にバツと向く鈴蘭。

しかし貴瀬の表情はいつものニヤケ顔のようで微妙に違う。視線を追うと耳まで赤くした翔希と顔が赤いクラリカが。

えーと……とりあえず、煽つとく？

「どうした勇者様。羨ましいのか？んん〜？」

「だっ！黙れ！貰っ様あ……貴様だけは！」

「いや、触ってるの俺だけどね」

「そうか……朝夜。ウブな勇者様に感想を聞かせてやれ」

「はい!？」

「あー……思ったよりある。着やせするタイプなんだな。うん、俺好みのちょうどいい大きさだね」

「~~~~~っ!！?」

正直な感想を言ったら鈴蘭が首まで真っ赤になった。なんだこれ、可愛いな。つてか、俺だつて恥ずかしいんだぞ。

「いま厄介なのはレベルの足りんクソガキではない。あのシスター

だ。協会はともかく……異端審問会が出張ってきてたとは計算外だ」

「異端……?」

「そうだ。しかも第二部……ただのシスターじゃない。あんなすつとぼけたツラはしているが、超一級の殺し屋だ」

「ハア……」

「へーあれが。なーんか血の匂いがすると思ってたけど、第二部なら納得だわさ」

「そういうことだ。というわけで鈴蘭。喘げ」

「どういうわけで?」

「貴瀬!。喘がせたほうがいいか?」

「喘がせるって何!?!?」

「出来て、君が後でぶん殴られるなら別にいいぞ」

「ぶん殴られる程度で鈴蘭喘がせられるならチャレンジするぜ!」

「え!?!やるの!?!?」

「安心しろ。そこまでヤバイことはしないから。せいぜいR14くらいだよ」

「安心できるかあっ！」

鈴蘭が小声で叫んでるうちにずっと頭を撫でていた右手でフルフェイスヘルメットを外し、クル　ゼ仮面を着けた顔を露出させる。

「っーわけで、朝夜、いつきまーす」

「いや、っーわけってひゃあー!？」

まず耳から。軽くハムツとくわえる。あとは舌で外側から……徐々に内側に……。

「ちゅっ……んむっ……レロ……はあ……」

「ひゃ、ちょ……くすぐったいい……あん……」

ふむ、耳が弱いのか？ならば……ねじ込んで……。

「くちゅ……ぴちゅ……レロ……」

「やあ……そこ、ホントに……だめえ……」

よし、耳を凌辱している間に、空いている右手で……首筋から背中にかけて……ツツツ……。ああ、服の上からね？

「んっ……あさやあ……あ……！」

流石に胸揉む訳にはいかないから……エプソンから引っこ抜いて……代わりに足の方を……少しスカートに手を入れて……。

「え？そ、そんなところ……！」

まあ、流石にこっちも直接はいかずに……陸上部らしい、ほどよく引き締まった太ももの内側に……指を走らせてと……。

「んっ……っ……」

「はいお口あーん」

「ふえ……？んむっ！？」

右手の人差し指を……第二関節まで口に突っ込んで……。

「かき回すぞ鈴蘭。噛むなよ？」

グチュグチュグチュ……。

「んー！んー！んっ！？」

中指も押し込んで……二本で舌を挟むように……歯茎の裏……頬の内側……。

「ん……！んむ……！」

口も凌辱……再び耳の方とは……耳から舌を……頬……首筋にと……。

「はむ……レロ……ペロ……チュパ……」

「ん……ひはぁ……」

口の方は……もういいか。引っこ抜く。

スポッ。

「っぷは……はぁ、はぁ……」

鈴蘭の顔は熟したリンゴより真っ赤。目を潤ませ、口の端からよだれが垂れており、息が荒くなっている。抜いた指からは鈴蘭の唾液が糸引いていた。

「ほら、鈴蘭。舐めて綺麗にして」

「うん……ペロ……ちゅる……ねろ……」

朝夜の言った通り、指の唾液を舌を出して舐め取る鈴蘭。

……なんだコレ。滅茶苦茶楽しいな。

「俺ってSだったのか……」

「自分からやりだしといて何を言っているのだ君は……。鈴蘭、君もだ。トリップしてないで戻ってこい」

「……ちゅる……ペロ……ふわあい……？……はっ！？わ、私は何を……！？」

あ、覚醒した。

「わ、私……汚されちゃった……」

「気持ちよかつたる?」

「……………」

「正直に」

「……………」（コクッ）」

顔を赤くして頷いた鈴蘭。正直だね。

「やり過ぎ感が否めないが、上出来だ。見る。クソガキがノックアウト寸前だ」

貴瀬がそう言うので翔希の方に目を向けると。

「~~~~っ!~~~~っ!~~~~っ!」

赤くなつた鼻を押さえて悶えていた。え?あれで?ウブだなあ……………。

一方クラリカは……………翔希よりは免疫があるらしい。顔を覆った指の隙間から、こっそりこちらを除いていた。

「うっはぁ……………朝夜さん激しいっすね……………。ってか翔希さん。あの

メガネの人、誰っすか？」

「……い、伊織魔殺商会……悪の組織のボスだ……！」

「へえ……？」

瞬間、クラリカの目に、薄氷のような輝きが灯り始める。

「ってことはあ……悪人っすね？」

「くくっ、その通りだ。初めまして、シスター？」

「ご丁寧にも。ですが、私は悪党に挨拶する言葉は一つしか持っていないっすよ」

一瞬だった。モーゼルを引き抜き、その木製ホルスターと組み合わせる。ライフルのように肩に構える。

「天に召しませ」

ぱんっ！

「ずおおおっ!?!?つぶねえ!?!?ってかこっち狙い!?!?」

てつきり貴瀬を狙うのかと思っただらこっちに弾丸が飛んできたので、体を引いてかわす。耳元で「ぴゅん」という弾丸の飛翔音が聞こえた。

髪の毛が数本はらりと落ちる。ってか、「天に召しませ」って言葉の使い方違い?!?」

「くくっ。そんな時代遅れのモーゼルで僕の部下を倒せるとでも思っているのか?」

「あー、ビックリした……ってか、鈴蘭俺の腕の中にいるんですけど!?!?」

「吾川!」

翔希が怒りと焦燥の狭間で叫ぶ。が、シスターは無視する。

「聖なる巫女には主の御加護が超あるっすよ!平気っす!」

「いやそんなわけ(ぱんっ!!)なあああっ!?!?」

容赦なしかよおい!?!?頭大丈夫か!?!?

「だあもう！噂くらいしか聞いたことなかったけど、マジでイカレてるな！聖言の一言目に曰く、汝殺すことなかれじゃないのか!？」

鈴蘭を庇うようにかわしながら叫ぶ。母さんから教わった聖言にはそんなのがあったはずだ！

「甘いつすね。その言葉には続きがあります」

「……なんですと？」

「汝、殺すことなかれ……でも悪い奴は殺してもオツケエ!！」

「へー、そーなのかー……」

ぱんっ！

「……って、んなわけあるかあっ！ルーミアもビックリだよ!！」

(……ノリツッコミ入れられる余裕はあるんだ……)

ぱんぱんっ！

(……それにしても朝夜……さっきから庇ってくれてる?)

「やめるクラリカ！何を考えているんだっ！？」

見ていられなくなったのか、翔希がクラリカを止めに入った。ってか遅えよ！

「話してください！平気っすよ！マジで五十メートル先のコインを撃てるっす！」

「相手は動いてる人間だ！やめろっ！」

いや、人間とは言いがたいんだけどね。

組みつ解れつした結果、翔希がクラリカのモーゼルを投げ捨てる。

そんな二人をよそに、チャンスとばかりに貴瀬が駆け出したので、置いておいたヘルメットを被り鈴蘭をお姫様抱っこで抱えて追いかける。

「バカが。やっている」

「うわ、すげえ悪党っぽい台詞……っつか置いてくなよ！」

貴瀬の悪の組織らしい台詞に悪態つきながら隣に並んだが、それに気付いた翔希が桁外れの跳躍力で朝夜達を飛び越え、着地したとき

には一本しかない階段の前に対峙していた。

「伊織動くな！」

「っ！」

「お？」

翔希の手にした剣が、朝夜の喉元に突き付けられる。それを見た貴瀬が足を止めた。

その剣先は微塵も震えていない。修練の結果か。

……けどなあ。

「吾川を放してくれ」

「無駄だぞ勇者君。お前じゃ俺は切れねえよ」

「そっちこそ無駄だ。俺に切れないと思うなら、なぜ立ち止まったんだ」

「そういう意味じゃなくて”物理的に切れない”って意味なんだけどな」

「……………」

「……………」

焦げ付くような緊迫した空気に腕の中の鈴蘭は身をすくませている。

「……………伊織、借金ぐらいなら俺が肩代わりしてもいい。吾川を自由にしてくれ」

「くくつ。聖女を金で買うか？」

「黙れ！二度と下らないことを言うな！」

鋭利な切っ先は精密に、朝夜の首の皮一枚ほどを突いた。

「勇者……………勇者ねえ……………お前が勇者なら、母さんの方がよっぽど勇者らしかったよ」

「何……………？」

「お前は勇者じゃない。勇者に憧れるだけの愚者、ピエロだよ。俺の母さんの足下にも及ばない」

「っ……………！」

翔希の黒い相貌が苦しむように細められる。

「俺は悪だぞ勇者君。悪事を働く闇の使者。人を殺したことだつてあるさ。お前が勇者だつて名乗るのなら、俺を殺して、この魂、浄化してみせる……！」

「朝夜……？」

鈴蘭からはヘルメットのせいで朝夜の表情は見ることはできない。しかし……。

(泣いているの……?)

「……アンタの母親のことなんて、俺は知らないし、わからないさ……けど、コレだけは言える」

「……………」

一切の迷いを振り切った目をした翔希が
ゆっくりと剣を降ろした。

「諦めないのが、勇者だっ！」

「だからお前はピエロなんだよ！勇者あぁっ！」

二人が叫ぶと同時に翔希が見せたのは刃ではなく、その腹。あの剣の質量で殴られたら、ただではすまない。

「だったら！」

「うおらあっ！」

だが朝夜は、その振りかぶった剣に迎えうつように蹴りを放つ。普通なら脚の方がへし折れる。だが

ガキンッ！！

「なっ！？」

鋼鉄と鋼鉄がぶつかり合うような、金属音と共に剣と脚が交差して止まる。

自身の剣が腹とはいえ、ただの蹴りに止められたという事実には怯んだ翔希の一瞬隙をついた朝夜が、その場で片足を軸にした廻し蹴りで剣をのけぞらせ、さらに回転。翔希の顎に爪先をクリーンヒットさせた。

「っ……あっ……！」

「寝てるや」

脳を揺らされてよろめいた翔希の顔面に蹴りを入れて、走る。見れば貴瀬も走り出していた。

「先輩っ！」

「鈴蘭。俺を恨むか？」

「え……?」

「恨んでくれて結構。俺は恨まれ慣れてるからな。でひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっ」

「……………」

「朝夜！くつちャべってないで、とつとクソバカ給仕を車に乗せろ！」

「アイアイサー！」

「ぐっ……くそ……っ」

「翔希さん、鼻血出てるっすよ?」

「蹴られたせいだよ……」

脳の揺さぶりを誤魔化すように両頬をぱんぱんっ、と叩いて袖で鼻を拭い、剣を拾い上げた。

「今までどこにいったんだクラリカ……」

「何言ってるっすか。翔希さんが私のモーゼル捨てたんじゃないっすか」

そんな彼女は木製ホルスターと拳銃をベルトに戻してから、帽子の上や肩の辺りに乗せた蜘蛛の巣、木の葉を払いのける。

「拾ってきたっすよ」

「とにかく追っぞー！」

「大丈夫っすか？顎蹴られてたみたいっすけど」

「このくらいなんともない……！」

遊歩道の階段を猛然と駆け下りていく。

駐車場まで降りてくると、伊織たちはまさに車に乗り込もうとしており、朝夜は赤いバイクに跨がっていた。

「すっごい速そうな車っすね。ゴキブリみたいな。バイクの方はライトが虫けらの目みたいっす」

「ディアプロにZX-12R!?あの成金め!」

ふあがんっ!!

鼓膜のおかしくなりそうな音を立て、伊織の車がスタートを切った。あとに続いて朝夜のバイクも走り出す。

翔希のバイクはCBR400F 二十年も前に発売された旧車である。

最高速こそ時速一六〇?にも満たないが 舞台は狭い下りの峠、絶对的な出力差は問題にならない。小回りが利くバイクの方が有利なのだ。ZX-12Rにならともかく、ディアプロに負ける道理はない。いざ、十六インチホイールの回転性を見せるとき。

「乗れクラリカ!」

「のれくらりか……って、なんか呪文みたいっすね」

おんっ!!

軽やかな音で鋼鉄の愛馬が目覚めます。

『おい、追ってきたぞ』

「お、来たか……しかしお前さあ」

『あん？』

「ほとんど喋る機会ないよな」

『うるせえよ！さっきも喋るなつつたのお前だろカスっ！靴に画ビヨウ仕込むぞ！』

「えー……？なんつー嫌がらせだよ……」

《《貴様ら漫才しとる場合か？》》

「いや、漫才ではないんだけど……」

行きと違って今度は背に付けたままにしたダーインと会話しながら貴瀬のディアブロを追う。

「どつすんの？追ってきてるぞー」

《くくつ、たかが四百マルチの単車に遅れなど取るか》

「けど道狭いぞ？」

《た……対向車とか来たら衝突します……よね？》

《嫌なら祈れ》

「無茶苦茶言っなあ……」

若干呆れながらミラーを覗くと、朝夜と同じく右に左に車体を倒しながら、翔希のバイクが迫ってきているところだ。

《追い付かれますよ！》

《わかつている！》

「ただでさえさつきと違う道通ってんだから、事故るなよー？」

道は細まり一直線。片や絶壁、片や崖。ディアプロでは思っようにスピードを出すことが出来ない。

《くそ、予想外の展開だ》

「足止めするか？」

ぎいんっ！

上空からの兜割りを片手に持った剣で受け止められる。

「っ……おらっ！」

「おっと！」

単純な腕力で弾き返され、その反動でバイクの後ろへ一回転しながら跳ぶ。

翔希のバイクとすれ違ったZX-12Rの座席に着地。再び急ブレ
ーキで方向転換し、CBR400Fを追う。

「うしろもーらいつと」

『ケツについたぞ！浣腸でもかましてやれ！ぴぎゃあああ！』

「下品だねお前は……しかしまあ……」

姿勢を低くして、ダーインの先端を前方に向ける。するとダーインの刀身が淡く黒く光だし、尖った先端に集まって野球ボールほどの球になる。

なんか失礼な会話しているが、気にしない！

《……む？朝夜、攻撃中止だ》

「あー？なんで？」

『まだ暴れ足んねえぞ！一人もぶっ殺してないしな！』

《殺しちゃダメだから！？》

《いいから止める。そのバイク売っばらうぞ》

「へーへー……」

ちっ……面白くなってきたのに。

そう思いながらもダーインを鞘にしまっ。

「ってか、どうすんだよ？」

《まあ見ている》

ここぞとばかりに貴瀬が車速を上げた。下りの一直線。先の見えな
いカーブが迫っている。おいおい、本当に大丈夫だろうな？

朝夜からの攻撃がやんだことにより、スピードを上げた翔希のバイクが迫る。

「終わりだ伊織っ!」

「ほざけ」

カーブの寸前、貴瀬が急ブレーキで一気に停車。

翔希のバイクはディアプロの後ろに思いっきり突っ込み、車を飛び越えた翔希とクラリカはガードレールの向こう、森林地帯の奥底に消えていった。

……ってあれ？俺もぶつからね？

「……だあああああっ!?!」

慌ててバイクを横倒しにして急ブレーキ。タイヤがディアプロの後部に「がつん」と軽く当たったところで止まった。

《いやあああああっ!?!せえんばーーーーーいつ!?!》

《くくっ、馬鹿が。交通弱者という意識がなかったようだな》

「すみません、こっちのことも気にかけてくれませんかねえ!?!」

《だが……なぜ向こうへ行かなかった》

《へ？》

《なぜあのクソガキについていかなかった？いくらでもチャンスはあったはずだ》

《だ、だって……急に巫女とか言われたって……。それに借金は返さなくちゃいけないし……》

「鈴蘭はいい子だなあ」

『アホなだけだろ』

《まだ世俗の方が常識か。君の中では》

《魔王とか聖女とか……私に世界の命運がかかってるなんて言われても……バカみたいじゃないですか》

冗談めかして言う鈴蘭に、貴瀬は笑った。

《くくっ、そうとも。いい子だ、鈴蘭》

「魔王……ねえ……。勇者に対して世界の半分をくれてやるっ、とか言っつのかね」

《竜魔王か。また古いのをだしてきたな》

「ああ、ラハールでもいいな。ゼタ様とか。……鈴蘭、帰ったらゲームやるっぜ」

《え？あ、うん……ねえ朝夜》

「んー？」

《……さっきはありがと。助けてくれて》

あー……？

「……なんかしたっけ、俺」

《なんかって、ほら。ミストゴーレムとかいう……》

あー、あれか。

「……いやいや、シスターにも言ったけど、俺じゃないよ。お礼言いたきゃ勇者……じゃないな。朝日にでも言いな」

《いや、絶対嘘でしょ》

「嘘じゃねえよ。俺はこれでもガラスのハートの持ち主なんだ。あんなの見たら腰が抜けちまうよ」

《防弾ガラスの間違いだろう。もしくは強化ガラスか》

「ぐぬ……」

何故か言い返せなかった。

《……とにかく、ありがとっ。それだけ》

「……あいあい。んじゃ、独り言として受け取っておくよ」

《ん。……ご主人様。何ですかそのニマニマ顔は》

《ん？いや？なんでもないぞ？くくくっ》

《ぐっ……なんかすごい腹立つ笑みを……！》

《何か言ったか？》

《なんでもないですう……》

そんな会話をしながら、一同は帰路についた。

一方その頃。

「うー……翔希さん、生きてるっすか……？」

高い枝に洗濯物みたく引つ掛かったクラリカの声。

「死んでたまるか……あいつを倒すまでは！」

「そっつすね」

軽業師のような身のこなしでクラリカが降りてきた。

「まずは命があって主に感謝っと……でもこれからどうしましょうねえ。鈴蘭さんは、どうやら向こうに協力してるっぽいですよ」

「違う。あの子は……伊織に踊らされてるだけだ。でなければ、どうしてあんな奴に……！」

翔希にとっては伊織貴瀬という男は諸悪の根源でしかない。

「伊織……許すまじ！」

翔希が瞳を燃やし、拳を握り締めたときだった。気の抜ける電子音が森の静寂を打ち破る。

「あー、ちょっとごめんなさい。電話つす……あー、はい、クラリカっすう……………はあ。はあ」

(……………もう少し真面目なシスターはいなかったのか……………?)

と翔希は思う。仮にも現代の勇者なのだから、せつかくの決意が【犬のおまわりさん】の着メロで打ち砕かれるのは遺憾と言えば遺憾。以前はシスターなどついていなかったのだが、神の降臨間近にして大神殿から派遣されてきたのが彼女である。

並のシスターでないことは理解したが、彼女がどこで銃の扱いなどを覚えたのかは聞かされていなかった。勇者の供だから、と、その程度だ。

「はあ……………はあ……………そうなんすう……………ああ、そりゃあもう。超オツケーっすよ、司教様」

つるっ、ズテン！

立ち上がるうとした翔希は苔に足を滑らせ、木の幹に頭をぶつけた。彼女がケラケラ笑いながら話している相手が司教という事実。

神殿協会という組織は《預言者》を頂点として、四名の枢機卿、十

六名の司教、八十二名の司祭というピラミッド型の人事を敷いているが、司教ともなれば、裏では国会元首にも通じるほどの権力と聞く。神の降臨を知らしめるために世間一般に見せている様子など、氷山のまさに一角なのだ。

「はあ、そうなんすよお。確かに聖なる巫女でしたあ……ええ、それでは後でインジケータのログ送るっすよ。はい、司教様に主の御加護を……っ」と

携帯を切り、にぱっ、と弾けるような笑顔で振り返る。

「そういつわけっす翔希さん」

「どういうわけだよ！？それよりいいのか、司教様にそんな口の聞き方で！」

「主は平等っす。口の聞き方で御加護は無くななんないっすよお」

「はあ……で、どういつ話だったんだ？」

「実は枢機卿のうちお一人が、主の降臨に立ち会ったため日本にやってきたっすよ。でまあ、あれっす。聖戦ってヤツっすか？」

ぴっ、とクラリカは人差し指を立てた。

「東京に駐留しているフェリオール司教旗下、第十一聖騎士団を以て、聖なる巫女を悪の組織から奪還するっすよ」

Act・5 ラッピング料送料無料（イヌミミ、尻尾、肉球グローブ付き）（前

ページもギザです。

ビビった……前話投稿してからPVが急激に増えて……10000
PV、2450ユニーク突破しました！

これを機にもっと頑張ります！

その日の夜。

「奴らがバカなのは今に始まったことじゃない。問題は、そのバカどもが君を聖女と信じてしまったことだ」

と、例の教室にて例のスーツ姿の貴瀬は言った。席についているのは朝夜（仮面は元の鬼仮面に戻した）と鈴蘭だけだ。ダーインは部屋で寝ている。

「が、マジカライズ・インジケータが示したように、君が聖女になる可能性を秘めているのも事実らしい」

「ご主人様は私が巫女とかいうのだから、知ってたんですか？」

「……君はテレビを見なかったのか？」

テレビでは名護屋河鈴蘭って呼び掛けてたよな。鈴蘭なんて名前もそうはいなさそうだけど。

……いや待て。

「鈴蘭って借金を一本化してって最終的に突き当たったんじゃないの？」

「あれは嘘だ」

がたっ、と鈴蘭は椅子を揺らした。

「うそって……」

「まあこの際言っておこう。正確には、僕が彼らの借金を肩代わりした」

「そっ、それって、それって法的にはあり得ないんじゃない……」

「あり得ないな。そもそも連帯保証人でも成人すらしてない鈴蘭に債務が移動するわけないし……貴瀬、まさか面接した日に鈴蘭のアパートに来たヤンキーとかいうのは……」

「あの二人もエキストラだ」

「なっ!?!」

「うへ……まさかとは思ってたけど……」

机をぶっ叩きながら鈴蘭は椅子を蹴った。

「じゃあ私は自由なんじゃないですかっ！」

すかんつ（貴瀬の投げたチヨークが鈴蘭の眉間に命中する音）

「ったあああああ……い！」

「聞け。君が今いる世界は明文化された法が効力を発揮するような場所ではない。だが、僕は君を得るために、実際君の親達から債権を買い取った。そのために僕がばら蒔いた二十億というのも現実の話だ。そして……」

貴瀬は一旦言葉を切り、

「大半は君を君と知った上でも、喜んで金を受け取った」

「……………」

わざわざとどめをさすかね……。

「我が社はときどき、クライアントから大きな仕事を請け負うのだが……今回受けた依頼は、協会が言う神を降ろさないことだ。だから可能性のある君を、協会に先回りして手に入れた。だがその事情を唐突に説明して君は信じたか？」

首を横に降る鈴蘭。

「信じられないわなー。というかぶつちやけ今でも疑わしいだろ？」

「うん……ぐすっ……」

「ああもう泣かない。十六歳でしょうが」

目元の涙をハンカチで拭いてやる。

「とにかく座れ。だから仕事という形で、徐々にこの世界に慣れさせていこうと僕は思っていた。そうして秘められた力を君自信に自覚させた上で、君の立場というものを説明するつもりだった。今朝の不測の事態がなければ、だが」

あのシスターのことが……。

そっぴや翔希とは顔見知りっばかったけど、クラリカには始めましてって言ってたな。

……待て、何か引つ掛かる。何かを見落としてるような……？

「俺何も聞いてないんだけど？てっきり貴瀬が面白半分でどっかか

ら拉致つてきたのかと思つてた」

「僕をなんだと思つとるのだ君は……。君はどこかでボ口を出す可能性があつたからな。敵を騙すには、まず味方からだ」

鈴蘭は敵じゃないだろ。

「秘められた力……？私の……立場？」

「君はかなり複雑な事情を持っている。君は覚醒すれば聖なる巫女になれるが」

えーと、以上の情報と、勇者の言つてたことを照らし合わせると……。

「魔王になる？」

あ、ハモつた。

「そつだ。君は魔王候補でもある」

「は？」

またハモったよ。

「もうこの際だ、行ってしまおう。連中は神を降ろそうとしている。それを阻止するために、君には魔王になってもらう」

「えっと……………いやでも魔王って……………」

「安心しろ。素質がある、と言っただけだ。君はまだ、ただの人間だ」

「魔王になるとどうなるわけ？」

「語感のまま思え。だが勘違いするなよ。今の鈴蘭はただの人間、わが社のヒラ社員だ。さつきみたく口に指突っ込んで掻き回してもバチは当たらん」

「なんだ。ならいいや」

「よくないよ……………」

だって必要以上に畏まる必要とか無さそうだし。

「では座学の続きだ。君は、負位置の魔力という非常に希少な、強力な力を秘めている。無自覚に。故に覚醒したときどちらに転ぶか

わからない。それであのクソガキはシスターの言葉を拒んだのだらうな」

ふーん……？

「きっかけのようなものとは言え、君は神を降ろすほどの力を秘めているわけだ。先ほども言ったが、こちらの目的は一つ。神を降ろさないことだ。その方法は一つ。君が魔王となりへブンスゲートを直接打ち砕く」

「爆裂魔光砲で？」

「だから古いわ！なぜこの局面で初期ピッコロがでてくる！？せめて魔貫光殺砲にしろ！」

いやいいじゃんピッコロ大魔王。クリリン殺したりとかして残虐性満載だったんだぞ？

さておき。

「一から説明しよう」

貴瀬が黒板に、前に書いた断層のような、湖の断面図を描き始めた。湖畔に立つ樹木や泳ぐ魚が妙に上手い。

「これはマティ＝ガティのマトリクスと呼ばれる社会モデルだ」

「あー……………？」

「あ……………え？まていが……………？」

がつんがつん。(タライが二人に直撃する音)

「ぬおおおおお……………！」

「つたああいです……………！」

「十九世紀末のアメリカの社会学者、マーティン・ジェファーソン並びにガルチラ・ガランドが提唱した社会の仕組みというものは、王、王族、騎士、農夫 といった中世の階級社会はことごとくこの閉鎖された湖の中で表すことができる。といった旨のものだが、解釈を変えると、そのまま世界の仕組みを表すことができる。いいか」

貴瀬はまず、湖面に当たる部分をチヨークでなぞった。

「これが表層、つまり僕と出会うまで君がいた世界。ちょっとした風にさざ波が立つこともあるが、基本的によく日が当たり平穏無事な世界だ。協会の言う俗世、第一世界。僕が言う世俗、表の世界だな」

呼び方が違う意味はあるのか。

チヨークは一つ下へ。

「ここが対流。以前も言ったが暗殺者、スパイ、ギャングなどがいる裏の世界だ。静かながらも寒暖の差で流れがおき、表層を巻き込むことも、表層から何かが落ちてくることもある。それは世に言う不幸だ。薄暗いが、しかし表層から覗けないわけではない」

ふむ、わかる。スパイ映画やドキュメンタリーがあるくらいだし、一般人がテロや強盗に巻き込まれることも現実にはある。……筋は通っている。

鈴蘭と朝夜は頷いた。

底に近い部分をチヨークで鳴らす。

「深層。我々がいる闇の世界だ。もう光も届かん。表層からは見ることも感じることもできん。対流の連中は何かがあることは感じているが、その暗さに確かめる術が無い。水圧との戦いで、降りてくることもままならないからだ……」

最後に湖底をこつりとチヨークで叩いた。

「んで、最後に澱か」

「僕の台詞を取るなバカ者」

「おり？」

「長いことかかって上の層……つまり三つの世界から”墮ちて”きた塵や埃。成れの果てだな。なんかの拍子に浮いてくることがあるかもしれないが、表層まではまず届かない」

「だから僕の台詞を取るなど……いや、もついい。手間が省けた」

こつ、こつ、となんか退屈するようにそれを叩いていた貴瀬。言うか言つまいか悩んでいるように見えたが、

「ま……これが世界の仕組みというものだ。世界のバランスだ。協会はこれを崩そうとしている。崩すためのきっかけが、君だ」

「へ？」

貴瀬がチョークで描いた人の姿を、湖の中に立たせた。

「この湖に巨人が飛び込む。全ての層が突然入り混じり、表層はまず穏やかではなくなる。消滅だ。次に巨人に阻まれ対流も消える。消滅だ。せつかく降り積もった澱は巨人の足でかき乱され、巻き上

がり、湖は光など関係ないただの淀みとなる」

「その巨人が連中の言う神か？」

「そつだ。その結果世界のバランスが一変し、鈴蘭は聖なる魔神とやらも召喚できるようになるのらつ」

「……神様が降りると、平和じゃなくなるんですか？」

「光が強まれば影はどうなる」

「えと……濃くなります」

「ああ、つまり巻き上げられた澱が溢れ返ると。バランスとしては妥当かな」

「正解だ。大雑把に言えば魔物だな。詳しい理由は僕も知らんが、それを奴らは知らん。だが万一、そんなことになってみる」

「世界が大混らーん、なのは確実だな。闇の時代の到来だ」

「うむ、悪の組織としても、それ以上に悪い魔物が闊歩し始めたら商売にならんだらつ」

え？そつち？

貴瀬が深刻なため息をついた。

「……世の中は複雑でな。神が降りてきて平和すぎても、悪の組織以上に悪い魔物が現れても、こちらの商売は上がったりなのだ」

んなわがままな……。

「神が降りた後にも今の生活を保証してくれるなら、今ここで君を裸にひん剥いてリボンをつけて協会に付け届けてやるんだがなあ。もちろんラッピング料送料無料だ」

「なっ！？なんで裸ですかっ！？」

「任せる貴瀬！剥くのも巻くのも俺が完璧に仕上げてる！」

「なんで張り切ってるの！？」

「リボンはピンクと青。どっちがいい？あ、イヌミミと尻尾と肉球グローブもつけるか！」

「ネコミミだド阿呆！何度言ったらわかるのだ貴様は！」

「尻尾は腰に巻くベルトタイプと、尻の穴に直接ぶっ刺すタイプがあるけど」

「お、お尻の穴……？い、いやああっ！？絶対いやああっ！！」

すこーん、と。貴瀬が軽く投げたチヨークが、恥ずかしさのあまり半狂乱となった鈴蘭の眉間に命中する。

「裸や尻の穴や連中の嗜好はともかくだ」

「うっっ……ぐすっ……」

「君が協会へ言った場合、神が降りる。世界人口は三億人前後まで減少するということだ」

「……極端に減ったな、おい」

「そんな太古に沈んだ強大な魔物に打ち勝てる力は、現在ではもう協会しか有していない。神殿の復権によって残るのは、あのシスタのように病的なまで潔癖な狂信者か、罪など犯しようもない生まれたての赤ん坊ばかりだ。争いのきつかけとなるような野卑野蛮な心を持つ人間は尽く死滅する。鈴蘭が神殿で一つ祈ればそんな世界になる」

「……」

「このまま僕のところで魔王を目指す。神は降りない。協会の連中は嘘つき呼ばわりされ、権威を失墜する。悪の組織は万々歳。同業、及び関係各位より我が社には数百億は軽く転がり込む」

「おお、二十億なんてすぐ消えるじゃん。んでもって鈴蘭は世俗に帰れる。まさしく万々歳」

「代わりに魔王になるがな。その後どうするかは鈴蘭、君次第だ。さすがの僕や朝夜も魔王には敵わんだろっからな」

「……へへっ」

俯いた鈴蘭が元気なく笑った。

「何がおかしい？」

「ほんとにそんな力があるなら……おかしいなって」

……。

「捨てられて捨てられて……結局世界を滅ぼすような力まであって……私、どこまでもいらない子だ……」

「んな気にすんなよ。何も持ってないよりは、よっぽどいいと思うぜ？俺は」

「そんな簡単に言うな！何も知らないくせに！知った風に言わないで……！」

髪を振り乱し、鈴蘭は叫んだ。

その”紅くなりかけた”瞳に映るのは、裏切られた悔しさ、悲しさ、

怒り。

「……裏切られる気持ちなんて、俺は知らん。知りたくもない」

「だつたら！」

「けどな？ここの連中なんてそんなのばっかだぜ？リップルラップル然り、沙穂然り……」

「……………」

「睨むなよ鈴蘭。泣いても塞いでも何にも始まんぜ？どうせなら笑えよ。それが人生を楽しむコツだ。俺達はまだ十六歳だ。人間の寿命なんて長けりゃあと八十年もある。生きてりゃきつといいことあるさー」

「妙に爺臭い慰め方だな……貴様本当は何歳だ？」

「さつきも言つたる？俺は十六歳だよ。ニッシッシッ」

「……………ハア……………」

あれ、顔見て溜め息つかれた？

「なんだよ鈴蘭。溜め息なんてついて。俺のキューティクルフェイ
スに感嘆の溜め息か？」

「……朝夜は仮面つけてるでしょ」

「? (。□。) !?」

「いやそんな、【言われてみれば!?] みたいな顔されても……」

「 i l — l i o — 」

「……わかりやすい縦線顔に浮かばせて、両手両膝床につかれて落ち込まれても……」

「くそうっ！俺なんて最低のゴミ野郎だ！生まれて来なければよかったんだ！ああ……鬱だ……死のう……」

「……急に鬱になって、自殺宣言されても……」

「どうしよう貴瀬。思ったよりうけない」

「笑わせるつもりだったのか？」

貴瀬が呆れたような視線を向けてきた。シドイ。

「……もういいよ。朝夜見てたら、馬鹿らしくなってきた……」

「そうかい、そりゃよかった。ニッシッシッシッ」

朝夜が胡座をかく頃には、鈴蘭は勝手に席を立っていた。そのまま

病人のような足取りで扉に向かっていく。

「鈴蘭」

部屋から出る直前に朝夜が鈴蘭を呼び止めた。鈴蘭はゆっくり振り返る。

「安心しろ。俺は裏切らないから。泥船に乗ったつもりで任せとけいー」

「……………。うん…………」

朝夜の言葉に生返事を返して、鈴蘭は今度こそ部屋を出た。

「泥船スルーされた…………」

「君は何がしたかったんだ？」

「女の子は笑ってた方が得するんだよ。この女の半分は、まるで笑わないけど」

「…………ふん」

貴瀬は教卓のパイプ椅子に腰を下ろして、震える指先で眼鏡を押し

上げる。

ややあって、鈴蘭と入れ替わるように入ってきたのはみーこだった。何故か、協会のシスターの格好で、ふわふわと貴瀬のもとまで浮いてくる。

「なんだ？」

「……少し、焦ったんじゃないかしら？」

苦笑のこもったみーこの言葉に、貴瀬は疲弊した表情で長い息をつく。

「なぐにビビってたんだよ。確かに鈴蘭の眼、紅かったけど」

「……当たり前だ。」恐怖心を取っ払っている”君にはわかるまい。どう倒れても地球を打ち砕くような棒を、喉元に乗せてバランスさせているのだぞ」

「あら。そうなの……？」

「そんな怖いもんかね。鈴蘭は鈴蘭だろ？」

教卓の横に着地したみーこは幼子の話を聞いた程度に、にこにこ、おっとりとお首を傾げる。

朝夜はパイプ机に腰掛けて足を組む。

「君たちだからそんな風に言えるのだ。本当にわかっているのか？」

「ええ。懐かしいにおいがしたから。もう。思い出せないんだけどね……」

「俺はとりあえずヤバイってのはよく分かった」

朝夜はともかくとして、みーこの自重は、どこか寂しげにも見えた。何が懐かしく、何が思い出せないのか……それこそ”澱”である彼女にしか理解し得ぬものだろう。

「それで、内偵の結果はどうだった」

「内偵？え？スパイ行ってたの？」

問われて、みーこはポケットをさぐりメモ帳を取り出す。

「はい……まず、こちらの位置は把握されました。神殿協会がフェリオール司教の……ええと」

「いちいちそんな物に書き取るとは。スパイとしての自覚はあるのか？」

「だって……忘れてたあくん、もつと怒るでしょ？」

「たあくんｗｗｗｗ」

ど「じゃあっ！！」

「ばきゅらっ！？」

「はっはっは。二度と何も買ってやらんぞこのクソガキが……！」

「ぐふう……す、すいませんでした……」

「だ、大丈夫？」

「な、なんとか……」

ある程度距離があつたはずなのに一瞬で殴られた。ば、馬鹿な……
沙穂とかならともかく、まるで見えなかつたぞ……？

「みーこ、続ける」

「ええと、はい。第十一聖騎士団に出撃命令が下されました。今はまだ、移動手段の調達に手間取っているみたいだけど……この屋敷に来るのは確実です」

……第十一聖騎士団？

「へえ……？」

「なんだ？」

「いや？俺から全てを奪った連中が十一だったからさあ……！」

仮面の奥で、朝夜の瞳が、禍々しく、赤黒く光る。殺気が漏れだし、窓が軋む。まるで死神に怯え、悲鳴をあげるかのように。

「……落ち着け。一応言っておくが、殺すのはなしだぞ」

「わかってるさー。俺だってただの殺人鬼じゃねえんだから。千人目は決めてある」

「神か？」

「いや？神もいずれ殺すけども」

朝夜は机から下りて、出口に向かう。

「……雪辱は晴らす……！」

そう言い残して朝夜も部屋を出た。

「……ふん、ある意味ではあいつの方が鈴蘭より危険かもしれんな」

貴瀬が嘆息する。鈴蘭が魔王なら、朝夜は死神。魔剣で以て、ただ魂を喰らい続ける殺人鬼。

その感情には死への恐怖心も、殺すという行為に対する罪悪感など存在しない。

……つまり、例えば今ここで貴瀬を殺したとしても、何も感じない。

「あ、殺しちゃった」くらいしか思わない。そう意味では常識ある鈴蘭の方がまだましだ。

「くくつ、棒は二本だったか」

「……たあくん、それで、どうするの？」

「鈴蘭が覚醒するまでは、ホームグラウンドであるこの屋敷で時間を稼ぐしかない」

みーこの重い息遣いが聞こえたが、貴瀬は構わず続けた。

「君は鈴蘭に信用されている。念のため、今の状況も含めてここに留まるよう説得しろ。聖騎士団の到着時刻は予測できるか？」

「……それでも明日の夜には、きっと……」

「わかった。もう君も寝ろ。いいな？余計な血を見たくなければ僕に従え」

「本当は、魔王になんかしたくないのよね……？」

まるで確認するかのような声色だった。

貴瀬は無言。

少しして、悲しそうな声。

「……どうして争わなくちゃいけないの？協会のランディル枢機卿は、とても立派な方でしたよ。信者の皆さんも優しい人ばかりで……たあくんだってほんとは」

「黙れ。寝ろ」

一方的に会話を打ち切り、貴瀬は不機嫌に部屋を出た。残されたみーこは、深い息を吐いて俯く。

Act・6 幼女、蛇、ドクター（前書き）

べじもギザです。

ちょっと独自設定、独自解釈があります。

そんな作者の駄文でよかったら、読んでいってください。

Act・6 幼女、蛇、ドクター

「暇だ」

『暇だチクシヨ』

現在朝夜は自室のベッドの上でゴロゴロしまくっていた。とにかくやることがない。仕事も特にない。ゲームやテレビの気分でもない。

「地下にでも行くか……？」

『魔物の魂なんか喰い飽きたっつーの……人間の魂食わせろおっ！』

「無茶言つなよ……」

何気なく、窓の外を見る。デイズニールランドの半分くらいあるとかいう巨大な庭では鈴蘭、みーこ、沙穂がメイドらしく箒で掃除していた。

「健気だねえ……」

『あん？何がだよ？』

「鈴蘭だよ。魔王云々の話されてもまだここに残ってるんだから」

『はっ、馬鹿なだけだろ。とっとと逃げりゃいいのによ』

「それもしたくないってのが鈴蘭の本音だろうけどな」

『あ？』

「普通の暮らしがあの子の願いだ。ここから出てったところで協会に取っ捕まるのがオチだろうからな」

「というか貴瀬なら学校爆破とかやりかねないし。」

「借金はインパクトあるきっかけに過ぎなかったのだ。既に鈴蘭は仕事と称して悪事を重ねて、世俗と自分を隔絶させてしまっている。」

『はっ、気づけば脱出不可能な鳥籠の中ってわけか。アホだな』

「まあ、つい最近まで世俗暮らししてたただの女の子が、あんな非日常の中で冷静に考えろってのが無理な話だけどな」

再び窓の外を見ると、鈴蘭とみーこが何か話していた。そして、館の方から貴瀬が物凄いスピードで走って行って、宙に跳んでみーこに空中後ろ回し蹴り。

側頭部直撃で笑顔のままみーこは頭から吹っ飛び、きりもみ、土を巻き上げ地面を滑走する。

貴瀬が何か怒鳴り散らし、鈴蘭がみーこの前に立ちはだかる。再び何か話したかと思うとみーこは館の方に小走りに駆けていく。……なんで少し嬉しげ？

そして鈴蘭と貴瀬も館の方に歩き始め、後には沙穂一人が残された。

「……なんだっただ？」

『俺が知るかハゲ』

その時部屋のインターホンがなり始める。

暇だったので、すぐに取る。

「ただいま電話に出ることが」

《すぐに僕の部屋に來い》

そして切れた。くそっ、ネタに走れなかった……。

とりあえず、無視すると後が怖いので、行くことにした。目指すは四階。貴瀬の部屋である。

『……っつておい！置いてくんじゃねえええッ！……！』

ダインをベッドの上に置き去りにしたまま。

広々とした室内、落ち着いた色合いで統一された調度品に混じる朝夜と鈴蘭。

朝夜がやって来た時には既に鈴蘭と貴瀬はいた。あれ？そっちは外にいたよね？

「今回の仕事はお使いだ。行ってこい」

貴瀬が机のノートパソコンを脇へどかすと、代わりにリュックサクと水筒を机に載せる。そして何故か、卵ケース。

「いやあの……どこまで行けと？」

「なに、この屋敷の中だ」

「この水筒と……卵は？」

「それを届けるのもお使いの一つだ。卵は割るなよ」

「ハア」

鈴蘭が水筒を手に持ってちやぶちやぶと鳴らしてみる。

「酒かなんかか？」

「ただの砂糖水だ」

「砂糖水？」

「かなり濃く溶かしてあるから、間違っても君達は飲むな」

ちやぶちやぶ。

「……砂糖水ですか？」

「空を飛ぶ氷砂糖？」

「空を飛ぶぞ」

「イエス。イエスですマイマスター……」

全てを悟った鈴蘭は、そおっとそれを机に戻した。続いて卵ケースを手に持つ。

「ただの卵……ですよね？」

「他に何かあるのか？」

「いえ、こつ……魔物の雛が産まれてきたりとか」

「ただの卵だ。二十個で一万円の高級品だがな」

「高っ!？」

「……それが出てきた時点で、どこ行けばいいかわかったわ。俺は何をすれば？」

「君は道案内と、アレが暴走しないように見張れ」

「へーへー……」

鈴蘭が持っている卵ケース二十個入りをもらう。

「こつちのリュックは？」

「届け先に一緒に置いて来い」

「ハア」

鈴蘭がそれほど重くないリュックを背負って、水筒を肩から提げる。

「……………水筒と卵はともかく、お屋敷の中ってことは社員の人なんですか？」

「我が社の錬金開発担当と、リップルラップルだ」

「はあ！？さっさささ……………砂糖水……………ですよ！？」

「あの子とあの女が服用するわけじゃない。それより時間が無いのだ。僕も昨夜から徹夜でな、仕様書の作成に忙しい。だというのにあの女は……………」

貴瀬は自分が描いたというみーこの絵を見やり、イラつくように乱れ気味の髪をかき上げる。

「……………とにかく、行ってこい」

「ハア……………んじゃ行ってきます」

「はあ……………萎えるわ……………」

貴瀬が充血した目でパソコンと睨み合うのを横目に、二人は部屋を出た。

伊織邸は一階から四階、庭、中庭、裏庭、地下。裏庭には墓地まである。基本的に夜に行けばアンデット系統のモンスターに出くわしたりする。

で、今回の目的地は地下だ。どっからどう見てもダンジョンにしか見えない。

地上部分と打って変わって、石のブロックが敷き詰められ、積み重ねられた、それこそ迷宮の形容に相応しい通路を二人は歩く。

「朝夜。錬金？開発担当の人って、どんな人なの？」

「んー……ほれ、前に話した魔女だよ」

「ま、魔女……？」

鈴蘭の脳裏で黒のローブにトンガリ帽子の長鼻の老婆が「イッヒツヒ……」と笑いながら謎の紫の液体の入った大鍋を木へらで掻き回している映像が浮かび上がった。

「そんなのじゃなくてもっと若いぞ。まあ、あの魔女は見た目なんてあてにならんけどな」

「そ、そうなんだ。……あれ？心読まれた？」

「ついたぞー」

「あ、うん」

数分で辿り着いたのは『技術開発室』と書かれている部屋だった。邸内においては珍しく、金属製の扉である。

「お届け物です……」

「うーっす……」

「どーぞー」

中から聞こえてきた声に従う。

部屋の様子は、学校でいう理科室のようなもの。ただし黒板には複雑怪奇な計算式と魔方陣、魔女文字が書かれていた。机という机にはガラスの実験器具がところ狭しと並び、連結され、色とりどりの液体や気体を流している。

「待ってたの」

「うふふ、いらっしやい」

つぶらな瞳を瞬かせたリップルラップルが言う。

そしてもう一人。ありがちなセーターとタイトスカートの上に白衣

を纏った、水色の、微妙に横に跳ねたショートヘアで丸眼鏡の女。

「初めましてね。私はエキドナ。ここの錬金開発担当よ。よろしくね」

「は、はい。吾川鈴蘭です……これでいいんですか？」

「ええ、確かに」

エキドナは鈴蘭がリュックから取り出した包みを受け取り、まず包みに挟まっていた手紙を開いた。自身が目を通して、リップルラッブルに渡す。リップルラッブルはきよときよとと黒目を動かし、ほうほうとでも言うように二度頷く。

「少し、待つ。すぐできるの」

言い残して、リップルラッブルは実験器具のジャングルの中に入っていた。エキドナは棚からなにやら黄色の液体の入った瓶を取り出す。

リップルラッブルが包みを解くと、中の物……青く輝く幻想的な粉をピーカーの一つに加え、あちこち動き回って器具を操作し始めた。バルブを開けたり、栓を閉じたり、火を入れたり。

「これ……全部二人で準備したんですか？」

「いいえ？ほとんどはリップルリップルかしら？ここは基本リップルリップルの領域だもの」

そう答えたエキドナは黄色の液体を、青い光の粉の入ったビーカーに混ぜる。

粉は液体と溶け合い、胸のすぐようなエメラルドグリーンに変色していく。

「わあ。まだ小さいのに……天才だねえ」

「それでも、ないの、こう見えても、なかなかの努力家なの」

「鈴蘭。エキドナもそうだけど、リップルリップルも見た目なんてあてになら」

ぷしゅっ（エキドナが霧吹きで何かを朝夜の目に吹き掛ける音）

ばたばたばたばた（朝夜がのたうち回る音）

「目が、目があああああっ！！」

「ちよっ！？大丈夫！？」

「朝夜。女の歳について追及しないのが紳士の在り方よ。覚えてお

きなさい」

「魔女がなに言っただこの野郎……！」

「野郎じゃないわよ。ほら、遊んでいる暇はあるなら手伝いなさい。これをすりつぶしておいてちょうだい」

「くそつ、覚えとけよ……」

文句言いつつエキドナから受け取った何かの爪を乳鉢に入れて粉状になるまでガリガリと潰す。

「なんの爪なの？」

「多分リザードマンだろ」

「り、りざーどまん？」

「トカゲを人間大にして、二足歩行で武装している奴だとも思っ
とけ」

「正確にはサンドリザードマンよ……はい、次はこれとこれね。何
かわかる？」

と、補足説明したエキドナが差し出してきたのは、手のひら大の鱗
三枚と、白っぽく濁ったねちゃっとした液体の入った小瓶。栓で固
く閉められている。

「……サハギンの鱗に……これはなんの液体だ？」

「サキユバスの膾分泌液よ」

「ぶっ！？おまつ！？どっからそんなもん持ってきた！？」

「やあねえ……女に何言わせる気よ。恥ずかしい」

「……いや、お前なら持ってもおかしくないか……」

「ち、ちつぶん……？」

「あ、知らない？膾分泌液というのは」

「何妙なことを教えようとしてやがる！？あ、鈴蘭。このマスク付ける」

「あ、うん」

興奮作用のあるサキユバスの膾分泌液の臭いなんか嗅いだらどうなるかわかったもんじゃない。鈴蘭にマスクを渡して自分も着ける。

鱗を細かくパリパリと砕いて乳鉢に放り込み、瓶を開けて液体も入れて混ぜ、砕く。

最終的に何やら怪しい色になった液体を乳鉢ごとエキドナに渡す。

ふう、と一息ついて、鈴蘭がいつのまにかいないことに気付く。

見回してみると、『開けるな危険』と表記された燃えさかるゴミの箱を開けようとしている鈴蘭が

「だああああっ!?!」

「へっ?うわっ!?!」

そんな鈴蘭に慌てて押し倒すようにタックルをかます。

「な、なななな何!?!」

「ダメだ鈴蘭!命を粗末にするんじゃない!」

「え……そ、そんなに危ないの!?!」

「……………」

「ね、ねえ!?!」

「鈴蘭……何事も、深く突っ込むと危険な目にしか遭わないんだぜ……?」

諭すように、優しく言ってる。

「う、うん……そう……だよな」

それに何かを感じ取ったのが、曖昧だが頷いていてくれた。あ、危ねえ……！

「……で、あの……朝夜？」

「ん？なんだ？」

「い、いつまでこうしてるの……？」

「はい？」

えー、今の状況……普通に鈴蘭を押し倒している。さらにタックルかました反動か、スカートが若干めくっていたり、エプロンの肩口が外れている。

……よし。

「……問題ないな」

「大有りでしょ!？」

「ん？そうか？あのゴミ箱開けて消し炭になるよりはゲフンゲフンなんでもありません」

「言っただろ！？今お前はつきり消し炭って言っただろ！？」

「エキドナー。終わったかー？」

「何事も無かったかのように無視すんなあああつー！！」

「フッフ、元気な子ね。朝夜、これを掻き回しておきなさい」

「合点解つと」

エキドナーが一抱えできる位の錬金壺を指差したので、木へらで混ぜる。中はきれいなルビー色の液体に浮いた何かだった。……これはカノーナ結晶か。

鈴蘭が隣で見学しているなか。少しして、エキドナーが結晶のようなものを持ってきた。

「今度は樹氷結晶……作るのは、アルテナ結晶か？」

「そうよ。そのまま掻き回していなさい」

「アルテナ結晶……？」

「精霊結晶の一種よ。まあ見ていなさい」

朝夜が掻き回している錬金壺に結晶体を放り込む。すると、ピンク

色の煙がポフン、という音と共に上がる。

煙が晴れると、中にはルビー色の液体も二つの結晶体もなく、代わりに入っていたのはアクアブルーのガラス玉のような球体が三つ。

エキドナがそれを錬金壺から指で三つとも挟んで取り出す。

「うわぁ……綺麗ですね……」

「ふふ、これがアルテナ結晶の塊よ。魔導力の蓄積なんかに使われたり、魔法そのものを記憶させることも出来るわね」

「魔法そのものを記憶……？」

「コンピュータのプログラムは、それを構築する情報が必要よね？魔法も同じで、その魔法を発動するのに情報を構築する必要があるのよ。そのプログラムを発動させるキーが、いわゆる呪文というやつね。ただがむしゃらに魔力を練り上げれば良いというわけではないの。まあ、素質がある人なら構築のプロセスをすっ飛ばして発動できるけど」

「は、はぁ……」

「それでこの精霊結晶はその情報を記憶、蓄積された魔力でプロセス無しで数回限定で魔法を発動できるのよ。バッテリー付きの携帯端末ってところかしら？」

「ハア……」

「精霊結晶は魔法制作においても必要なものなの。魔法を記憶させた結晶と結晶を錬金して新しい魔法を誕生させたり、作り上げた危険な魔法を閉じ込めたりね……そう簡単に新しい魔法なんてできないのだけれどね」

「現存する魔法の半分以上を作り上げた女が何言ってるんだか……」

「昔から存在する魔法だけよ。今の協会が作った近代魔法も加えれば、三割程度よ……さて、これで私の仕事は終わり。リップルラッブルは……もう終わってるわね」

見ると、器具のジャングルの中にリップルラッブルの姿はない。

探すと、問題の水筒を抱えて部屋の奥、ドアの向こうに消えていくのが見えた。

「……いや、やばいって！お茶じゃないし！」

鈴蘭がダッシュしてドアを開けると、少女は今しも砂糖水を器に注ごうかというところ。

「ちょっと、待ったうわあぐえっ!?!」

「はい、落ち着け」

リノリウムの床に足を滑らせて転びかけた鈴蘭の襟を掴んで助ける。なんかカエルが踏み潰されたみたいなき声出したが、まあ結果オーライで。

「ゲ、ゲホゲホッ……」

「ダイジョブか？」

「う、うん、ありがとう……っていつかあんだ！その中身知ってるの！？」

「人間には、よくない薬なの」

そんな二人を尻目にリップルラップルは容器に入った砂糖水を部屋の隅に並んだ大きな竹籠の中に注いでいく。

「な、何してるの？」

「ほら、こいつだよ」

朝夜が竹籠の一つを抱えて持ってきて、中身を鈴蘭に見せる。

「え……と……？」

中身は透明な、ぷよぷよした饅頭のようなものだった。あるいは巨大なわらび餅。クッションほどの大きさがある。

「こ、これ……なに？」

「スライムだよ」

「すらいむ？」

「うん、スライム」

「……」

「……」

「あの、スライム？」

「あの、スライム。別にはぐれたりキングはいないけど」

「……実在したんだ……ていうか、なんで砂糖水？」

「モンスター魔物には、ただの栄養源なの」

「へえ……」

「人間には悪い薬で、育つの。ちょっとした、世の中の仕組みなの」

「？ ？ ？」

首を傾げる鈴蘭を、ぱっちりした目でじっと見詰めたリップルラッ
プル。

それも束の間。

「世知辛い世の中なの」

表情は変わらず、どこか寂しげな声で、少女は竹籠に視線を戻した。

「フッフ、私達もお茶にしましょうか。朝夜、淹れなさい」

「俺かよ!? ハア……まあいいけど……」

部屋に入ってきたエキドナの指示を受けた朝夜が竹籠をもとの場所に
戻し、棚を漁ってオシヤレなティーセットを引っ張り出す。

ヤカンに水を入れてコンロに乗せて火をつける。

「朝夜、お茶なんて淹れられるの?」

「母さんに教えられたからなー。一通りの家事はできるぞ。掃除洗
濯料理」

「へ〜……朝夜のお母さんって?」

「死んだ」

「へ？」

「死んだ。住んでた家ごと燃えてな。三年前だ」

「え、あ……」「ごめん……」

なんとなく、気まずい空気が流れる。

しかし。

「鈴蘭。ダージリン・ティーでいいか？」

「え？え、えーと……私、紅茶の銘柄とかわかんないし……」

「別名『紅茶のシャンパン』と呼ばれるダージリン・ティーはインド北東部西ベンガル州北部のダージリン地方で生産される紅茶の総称だ。紅茶の中でも特に香りを楽しむことを重視されているから、ミルクも砂糖も無しに、そのままストレートで飲むのをお勧めする」

「じゃ、じゃあそれで……」

何事もなかったように紅茶の蘊蓄を披露する朝夜にちょっと困惑しながら頼む。

「ね、ねえ……?」

「んー?」

「あの、私……ふやつ!」?

「おー、よく伸びるなー。それでいて柔らかい」

鈴蘭の頬を、うにょーん、と伸ばす。

「ふはははー、柔らかか柔らかか。たてたて、よこよこ」

「むあー」

たてたて、よこよこと鈴蘭の頬を引っ張る。

「んな昔の話で暗くなる趣味持ち合わしちやいねえよ。俺は」

「ふえ……?」

「昨日言っただろ?笑うのが人生楽しむコツだ。ふっきれてる訳じゃないけど、母さんのことで泣くのも悲しむのも辞めた。母さんは天国で笑ってるだろうしさ」

「あひゃや……」

「あひゃやじゃねえよ。朝夜だよ。さーて、お湯加減はと……」

鈴蘭の頬から手を離してヤカンの方に注意を向ける。

「フフフ、そういう話はまた今度にしましょう。鈴蘭ちゃんも座ったら？」

「あ、はい。ありがとござい！？」

「あら、どうかした？」

エキドナに座るよう促された鈴蘭の視界にさっきの暗い雰囲気をもとめてぶっ飛ばして場外ホームランするほどのものが入ってきた。それは。

シャー……。

と、鳴きながら先の割れた舌を出したり入れたりを繰り返している……蛇である。

しかもデカイ。テレビで見たことのあるアナコンダは最大900?も育つというが……この黒い蛇は、どう見ても1500?はある。

その蛇が、エキドナに軽く巻き付いている。

「あああ、あの、そそそれ……！」

「え？ああ、この子？私のペットよ」

「ペット！？」

「ええ。名前はヤマシ。これでも幼体なのよ？」

「これですか！？」

「ええ。可愛いでしょ」

いや、可愛いというよりも怖いという気持ちでいっぱいだった。今の鈴蘭は、まさしく蛇に睨まれたカエルである。

「大丈夫だよ鈴蘭。ちょっといかげなかつたら、特に何もしてこないから」

トレイに紅茶入りティーカップを人数分乗せた朝夜が後ろから話してくる。

「い、いや、でも……」

「大丈夫よ。餌あげれば、基本的におとなしい子だし。ほら、あーん」

エキドナが先程朝夜が持つてきた高級卵を大蛇……ヤマシの口に入れる。ヤマシは口に入れられた卵を丸飲み。

「ほら、可愛い」

「ハ、ハア……」

いや、愛嬌はあるかもしれませんが……。

「へい、ダージリン・ティー四人前お待ちい」

「いや、お寿司屋さんじゃないんだから」

ヤマシにビビりながらも席についた鈴蘭が朝夜の軽いボケにツッコム。

「熱いかもしれんから、気をつけて飲めよ」

「いただきまーす……」

カップに口をつけ、一口。

「あ……美味しい」

「ええ。それにいい香りね」

「紅茶ソムリエの名は伊達じゃないの」

「いつそんな称号得たんだ？俺は」

「まあ……私から言わせれば五十点ね」

「あー？」

「え？こんなに美味しいのに……」

「私はコーヒーを飲みたい気分だったの」

「んなこと知るかぁッ！」

エキドナのがままな発言に軽くキレながらもツツコム。くそっ、調子が狂う……！

「……お茶菓子が欲しくなったわね」

「作る時間なんてないからな。卵でも食ってるよ」

「いやいや、卵って……」

「それもそうね」

「へ？」

そう言ったエキドナは卵ケースから卵を一個取ると、そのまま「ヨイツ、と口に放り込んだ。

そして、ゴックン、と、丸飲みにした。

(え……え……？)

エキドナの喉に卵の形が浮かび上がり、そのまま下にせり下がっていった。

「ふう……やっぱりそのまま食べるのは、ちょっと面倒くさいわね」

「うん、俺もまさかマジで丸飲みするとは思わなかったよ」

「だ、大丈夫なんですか……？」

「ええ、平気よ？私の喉、柔らかいから」

「そういう問題か……？」

「まさしく、蛇女なの」

(この人もまともじゃなかった……)

「……できたの。かなり、いい感じなの。一緒に持つてくの」

「これもね。落とさないよう気をつけてね」

リップルラップルが注射器の入ったケースを持って鈴蘭と朝夜の元へやって来た。同じくエキドナからさらに数を増やしたアルテナ結晶の入った布袋と一緒に受け取る。

「ミッションコンプリート！つーわけで、戻ろぞ鈴蘭」

「うん。お邪魔しました」

「またいつでも遊びにいらっしやい。ヤマシもあなたを気に入ったみたいだし」

シャー……。

「あ、あはは……そうですか……」

「次はお茶菓子を持参するの」

軽く手を振るエキドナとブンブン腕を振るリップルラップルを残して二人は部屋を出た。

「……あれが、魔王候補ね」

「期待の超新星なの。スーパールーキーなの」

「フフフ……朝夜に悪影響を与えないといいけど」

「……少なくとも、死神は魔王の片腕になるの。多少の影響は、許容するの」

「約束はできないわね」

「うひゃあっ!?!」

「うおっ!?!どうした!?!」

地下通路いっばいに響いた着信音に、鈴蘭は身をすくませ、朝夜がそれに驚いた。静寂に慣れきっていた耳には大音声の携帯電話を、ポケットから取り出す。

「なんだ、ご主人様か……………はい鈴蘭です」

《今どこにいる》

「えっと……上に戻るところですけど」

《ではリップルラップルとエキドナのところで薬品と精霊結晶は受け取ったな》

「え？はい、なんか、針の無い注射器とガラス玉みたいな……」

《そうか。では急いで地上まで戻って来い。もうあまり時間が無い》

「時間って……？」

《予定より早く協会が動き始めたのだ。急いで君をスペックアップする》

ぶつり。つー。つー。

「……スペックアップ？」

鈴蘭を？……まさか。

「おお、もう夕方じゃん」

「うわあ。ほんとだ」

予想以上に時間が流れていたらしく、窓からは眩い西日が射していた。

「来たな。こっちだ」

吹き抜けのロビーから、貴瀬が手招きする。二人を待たずに歩き出す貴瀬へ、走って追いつく。

「あの、ご主人様。スペックアップって……」

「少々荒療治だが、君に秘められた力を引き出そうと思う」

「覚醒……ってことですか？」

「そうだ。いや、完全にというわけではない。そんな技術を持っているのは協会だけだからな。しかし君が『力』を自覚する第一歩にはなる」

「鈴蘭も聖騎士共と戦うわけ？」

「出来次第だ。逃げるにせよ今の鈴蘭ではな」

連れてこられたのは渡り廊下を進んだ離れの棟だ。最奥の扉をくぐ

ると、その部屋はまるで手術室の様相を呈していた。

ベッド、無影灯、使い方の見当も付かない種々の機械、モニター……そして、どこからどう見ても『危険』としか形容できない青年が一人。

「いひっ……いひひっ、た、貴瀬え……きき、今日は、お、女の子をいじらしてくれるって……ほんとうかい……？」

薄汚い白衣、ただ伸びただけのような長髪、片側だけに分厚いレンズがはまった黒縁眼鏡。……ドクターが唇をひくつかせている。

「そつだドクター。今日はこの子のスペックアップを頼みに来た」

怯えて朝夜の後ろに隠れていた鈴蘭は貴瀬に引つ張り出され、無理にドクターの前に立たされた。

「ひっ、ひひっ！か、かわいいなあ！いつ……いいのかい、伊織い！？」

「あー……頼むから、トラウマが出来ない程度にしてやって」

「女の子をいじるなんて沙穂ちゃん以来だからなあ。ひひっ、興奮しちゃうなあ……！」

あ、うん、聞いてないな。

「朝夜。私いまね、とんでもなく嫌な予感がしてるんだけど……」

「……すまん」

すぐさま、鈴蘭を背後から抱きすくめ、ベッドの上に押し倒す。革ベルトでか細い四肢を、手早く縛り付けていく。

「いいやああああああっ!?!?」

「くくつ。愚かだな鈴蘭。改造手術は悪の組織の特権だぞ。少しは喜んだらどうだ?」

「いいやあでえすうー!?!?!」

「鈴蘭落ち着け!大丈夫だ!ドクターはただの天才だから!」

「脱線さえしなければな」

「そんな表現がまかり通る紙一重な人に体を預けたくないんですけどっ!!もう脱線どころか横転してますっ!一人医療事故ですう!」

「はっはっは。鈴蘭はうまいこと言っなあ」

「爽やかな顔で笑うなあ！！こるあ！！人権をよこせえ！！」

「だから落ち着けての！安心しろ！目が覚める頃にはきつと楽になってるはずだからな！」

「安心出来るかあ！！それに楽になってるって意味の取りようによつてはやばい方向だろ！っていうか朝夜助けるお！！」

「……………すまん」

「いひつ、ひつ、元気な娘だなあ。そ、そ、それで！？僕の好きなようにいじっちゃっていいのかい！？」

「それだけは絶対やめろお！鈴蘭が二度と人間として生きていけなくなる……………！」

「うおいつ！…どういう意味だそれ！？」

「安心しろ。さすがの僕もそこまで無謀なことするつもりはない。ドクター、この通りにしろ」

ばっ、と貴瀬がドクターに突き付けたのは『仕様書 for 鈴蘭』なる書類。それを受け取ったドクターは紙面をペラペラめくって濁った視線を動かす。

「ああ……………私って、会社の備品みたいなもんなんだ……………」

「鈴蘭。きつといいことあるぞー」

「いや、助けてよ……裏切らないんじゃないの……?」

「……………すまん」

「ドリルっ!?!」

「ぶっ!?!」

いきなり叫んだドクターに噴き出した鈴蘭。だがそれは杞憂だったらしいことが、続く言葉でわかった。

「ど、ど、ドリルが書いてないじゃないかあ!ドリルは付けないのかい伊織い!?!書き忘れてるんじゃないのかい!?!」

「そんなもんはいらん!」

「じ、じゃあ目からビームは!?!ビームくらい出すんだよな!?!な!?!」

「ゼタビイイインムならぬ鈴蘭ビイイインムか!それは俺も見たい!」

「そそそつだる朝夜あ!やっぱりドリルとビームは必須だよねえ!ひひい!」

ごっくんごっくん。

「ぎゃああああっ!?!」

「何を意気投合しているのだこのバカ共が! いいからその通りにしろと言っているのだ! そのための仕様書だ!」

「わかったよう……」

観念したドクターが髪の毛を掻きむしり、仕様書を携えたまま別室に消えていく。

「まったく、どうしてうちの人材はこう、僕の言うことが聞けないのだ……」

「全くだなあ」

「貴様がその筆頭なのだがな!」

「マジで!?!」

「素で驚くな!」

「あの……ご主人様……?」

「ん?なに、心配するな。あいつは天才だ。少し切ることになるが傷も残らんぞ」

「いえ……私の心に、傷ができつつあるんですが」

貴瀬はしばし間を置き。

「……いやあ、そこまでは考えてなかったな」

「バーカ！たあくんのバーカアツ！！」

ずじやあつ！！

「げぶふおつ……！！」

「二連コンボとは大した度胸だ鈴蘭！！よしわかった。ドリルと目
ビームと指ムと口から波動砲、胸からロケットが出るように今か
ら土下座して頼み込んできてやる……！！」

「やばい、それ超見たい……！！だけどな貴瀬え！加速装置を忘れて
るぞ！あとロケットパンチと背中に仕込んだブースター！」

「きゃあああごめんなさいごめんなさい二度と二度ともう二度と
いいませんからああつ！！」

ばたん、と別室のドアが慌ただしく開いた。ゴム手袋、帽子、マス
ク、手術着一式に身を固めたドクターが転げ出てくる。

「ロケット!? ロケットを付けるって言わなかったかい伊織い!？」

「いいやあああああっ……!！」

「うおっ!? 調子乗りすぎた!? 落ち着け鈴蘭! 本気じゃないから! だから号泣するんじゃない!！」

「だったら助けろおおおおっ!！」

「それは……」

「……それは?」

「……ごめんね」

「バーカ!! 朝夜のぶあ……かあっ!!! うわあああんっ!！」

「なんか駄々っ子みたくなった!? ごめんなさい今のはちょっとふざけました!！」

「でえい! いい加減やかましいわ! ドクター! とつととやってしまえ! 余計なものは一切付けるなよ!！」

「いひ、ひいつ、任せろよお……! それより伊織い、この仕様だどここじゃあ足りないクスリと魔導媒体があるよう……?」

紙面を見せながら指差すドクター。

これだ、と貴瀬が渡したのは、朝夜と鈴蘭がリップルラップルから受け取ってきた注射器と、エキドナから受け取った精霊結晶。あー、やっぱりそういう用途か……。

「みんなグルかああああっ!？」

「黙れ」

「……………すまん」

朝夜が麻酔用マスクを口さがない鈴蘭にかぶせる。ボンベのバルブを開けると、鈴蘭は叫びながらも、あっという間にスヤスヤと眠ってしまったのだった。

Act・6 幼女、蛇、ドクター（後書き）

精霊結晶は別に伏線でもなんでもないので、気にしないでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2455/>

お・り・が・み 死神の黙示録

2011年9月28日20時02分発行